

敷島町文化財調査報告 第18集
(山梨県)

松ノ尾遺跡Ⅲ

マンション建設事業に伴う
縄文時代・古墳時代・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

敷島町文化財調査報告 第18集
(山 梨 県)

松ノ尾遺跡Ⅲ

マンション建設事業に伴う
縄文時代・古墳時代・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会



1. 松ノ尾遺跡第三次調査区出土の緑釉陶器



2. 松ノ尾遺跡第三次調査区出土の中国貿易陶磁器（白磁・青白磁・青磁）

序 文

敷島町では、近年民間の開発行為に伴う埋蔵文化財の発掘調査が急増しています。今回の調査もその例外ではなく、マンション建設に先立つ「松ノ尾遺跡」の発掘調査の成果をまとめたものです。

この遺跡は、今からおよそ1,300年前の古墳時代後期と、約1,000年前の平安時代にあたる大きな集落跡であることがこれまでの調査で明らかとなっています。

とくに、1994年に行われた第1次調査では大量の土器、石器、鉄製品などのほか、平安時代終わり頃の金銅製小仏像が2躯出土し、一躍脚光を浴びることとなり、町内をはじめ県内においても大変重要な遺跡であると認識されるようになりました。

今回の第3次調査でも、縄文時代、古墳時代、平安時代の各時代において当時敷島町内で暮らしていた人々の住居跡（イエ）が発見され、より一層内容の濃い遺跡であることが窺えます。

このように、私たちの暮らしている町には先人の残した多くの貴重な足跡を辿ることができ、町の財産でもある文化財を今後もなお一層調査・記録を精密に行って永久に保存し後世の人々に語り伝え、また教育普及に役立てていく必要性を感じざるを得ません。

最後に、開発者長田 毅氏の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成16年4月

敷島町教育委員会

教育長 山口 正 智

例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条地区に所在する松ノ尾遺跡の発掘報告書である。
2. 本調査は、マンション建設に伴って実施した発掘調査で、調査面積は約 250 m²である。
発掘調査から報告書刊行までの経費は、開発者である長田 毅氏が負担した。
3. 発掘調査は、平成 10 年（1998 年）3 月 13 日～5 月 11 日までの約 2 ヶ月間にわたって行った。
その後、整理作業は、断続的に行った。
4. 発掘調査および整理作業にあたった組織は、次のとおりである。
調査指導・主管 敷島町教育委員会
調査主体者 敷島町文化財調査会
調査事務局 敷島町文化財調査会
調査指導担当者 < 発掘調査・整理調査 > 大瀧正之（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査）
< 整理調査 > 小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）
5. 本書の遺物実測・トレース作業については、大瀧、小坂の指示のもと、青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美、関本芳子、高添美智子、望月典子が担当した。
遺跡全景および遺構は大瀧が撮影し、遺物写真の撮影および図版編集は小坂が行った。
本書の執筆、編集は小坂が担当し、最終的な全体校正を大瀧が行った。
6. 調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々より御教示をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝申し上げます。
小野正敏（国立歴史民俗博物館）、斎藤孝正（文化庁美術工芸課）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）
藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、羽中田壯雄（敷島町文化財審議会）、山下孝司、関間俊明（韮崎市教育委員会）、村松佳幸（長坂町教育委員会）、佐野 隆（明野村教育委員会）
7. 発掘調査ならびに整理作業参加者
青山制子、浅川松子、飯室久美恵、石川弘美、一瀬一浩、長田由美子、尾沢玉枝、小林明美、三枝延子、末松福江、関本芳子、高添美智子、近浦正治、保坂広昭、保延 勇、望月典子
8. 本遺跡の出土遺物および調査で得られたすべての記録については一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 本書の第 1 図は国土地理院発行の地形図（1：25,000）「甲府市北部」「韮崎」「甲府」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。
2. 遺物挿図中、断面が白抜きは土器・土師器・土師質土器で、 は須恵器、 は陶器類、 は磁器である。また、土師器器面が  は黒色処理された面を表記する。
3. 図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 遺跡をとりまく環境	
1. 遺跡の立地と環境	1
2. 周辺遺跡と歴史的背景	1
第2章 遺構と遺物	
1. 縄文時代	6
a. 7号住居跡	
2. 古墳時代	9
a. 1号住居跡	
b. 3号住居跡	
3. 平安時代	12
a. 2号住居跡	
b. 4号住居跡	
c. 5号住居跡	
d. 6号住居跡	
4. 時期不明	19
a. 土坑	
b. 溝状遺構	
第3章 遺構外出土遺物	21
まとめ	27

挿図目次

第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡	2	第12図 4号住居跡出土遺物	13
第2図 調査区位置図	5	第13図 5号住居跡と出土遺物(1)	14
第3図 遺構配置図	5	第14図 5号住居跡出土遺物(2)	15
第4図 7号住居跡	6	第15図 6号住居跡と出土遺物	16
第5図 7号住居跡出土遺物(1)	7	第16図 1・2号土坑と1~3号溝状遺構	20
第6図 7号住居跡出土遺物(2)	8	第17図 遺構外出土遺物(1) 縄文	21
第7図 1号住居跡	9	第18図 遺構外出土遺物(2) 古墳時代	22
第8図 1号住居跡出土遺物	10	第19図 遺構外出土遺物(3) 平安時代(1)	23
第9図 3号住居跡と出土遺物	11	第20図 遺構外出土遺物(3) 平安時代(2)	24
第10図 2・4号住居跡	12	第21図 遺構外出土遺物(5) 陶器・中世・石器	25
第11図 2号住居跡出土遺物	13		

表目次

第1表 住居跡出土遺物観察表(1)	17	第5表 溝状遺構一覧	19
第2表 住居跡出土遺物観察表(2)	18	第6表 遺構外出土遺物観察表(1)	26
第3表 住居跡出土遺物観察表(3)	19	第7表 遺構外出土遺物観察表(2)	27
第4表 土坑一覧	19		

図版目次

図版1-1 遺跡全景	図版5-2 2号住居跡出土遺物
図版1-2 発掘風景1	図版5-3 4号住居跡出土遺物
図版1-3 発掘風景2	図版6-1 5号住居跡
図版2-1 7号住居跡	図版6-2 5号住居跡出土遺物
図版2-2 遺物出土状態1	図版7-1 6号住居跡
図版2-3 遺物出土状態2	図版7-2 6号住居跡カマド
図版2-4 7号住居跡出土遺物	図版7-3 6号住居跡出土遺物
図版3-1 1号住居跡	図版7-4 1号土坑
図版3-2 1号住居跡カマド	図版7-5 2号土坑
図版3-3 1号住居跡出土遺物	図版8-1 2号溝状遺構
図版4-1 3号住居跡	図版8-2 3号溝状遺構
図版4-2 3号住居跡出土遺物	図版8-3 遺構外出土遺物(1)
図版5-1 2・4号住居跡	図版9 遺構外出土遺物(2)

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境（第1図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17 km、東西約4 kmと南北に細長い町である。本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ8～9割は標高1,704 mを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

2. 周辺遺跡と歴史的背景（第1図）

近年もっとも頻繁に発掘調査をおこなっている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代 町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期に稀な埋甕炉を有する縄文時代前期末の住居跡が1軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで6回の調査がおこなわれてきたが、1987年の中央高速自動車道建設における第I次調査で弥生時代の集落跡とともに縄文時代の住居跡計8軒（前期末1軒、中期7軒）が調査された。

現在のところ、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できるのは今のところ金の尾遺跡である。

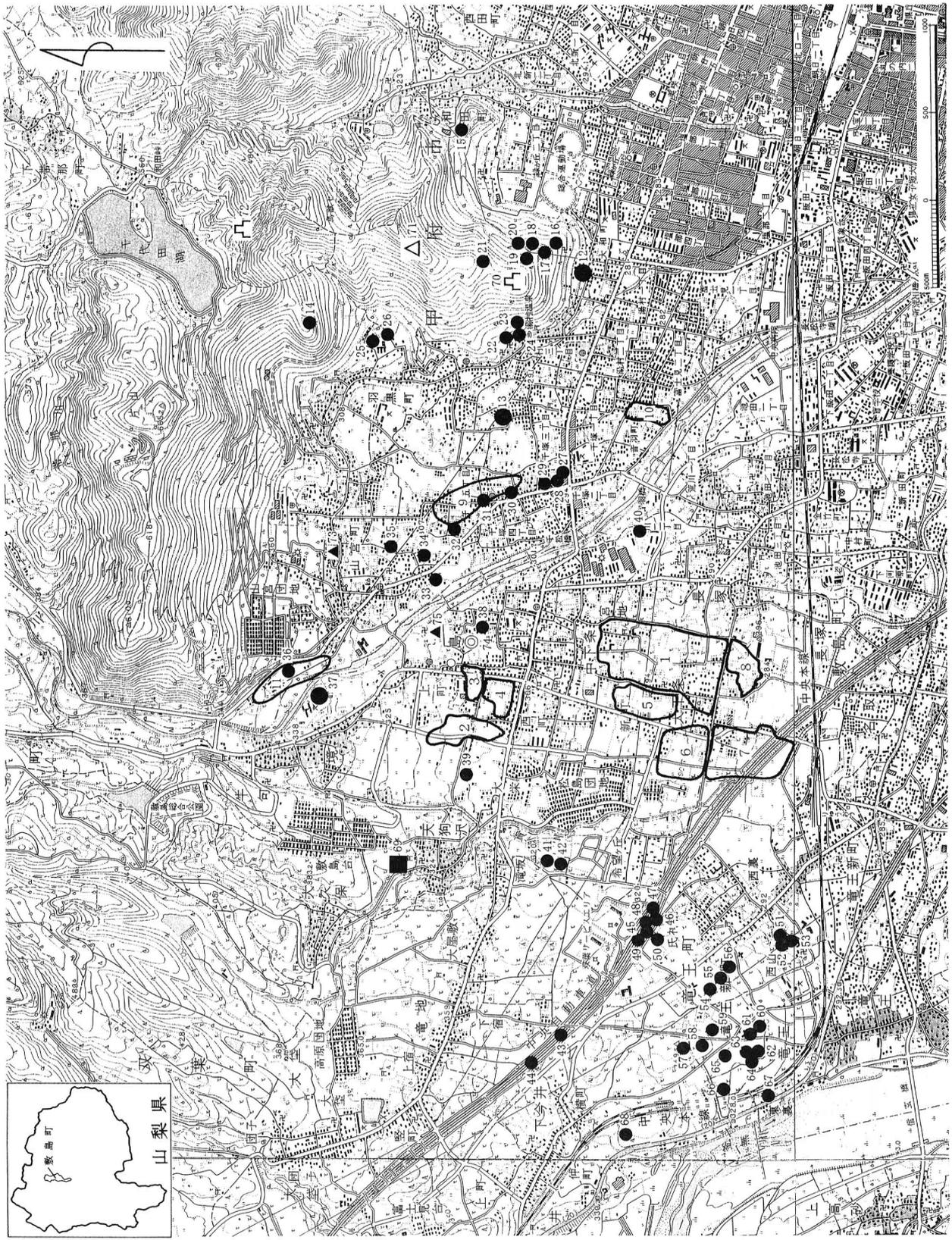
弥生時代 金の尾遺跡があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。第I次調査で弥生時代の住居跡32軒、方形・円形周溝墓17基をはじめ、集落跡を二分するとみられるV字の溝などが発見されており、県内でも最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物をみると、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

近年の第IV次調査で、I次調査で発見されたV字溝の延長を確認、発見された方形周溝墓には弥生時代後期のものをはじめとし、古墳時代前期、そして壺型埴輪を伴う古墳時代中期に該当する低墳丘墓も新たに確認された。1996年の第VI次調査では集落を外周する長さ約55 mにおよぶ大溝（環濠跡）が出ている。

古墳時代 これまで6遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、松ノ尾遺跡①、原腰遺跡②、三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などが上げられ、各遺跡ともS字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡（I次）では調査区内の落ち込みから水晶の原石8点と水晶製丸玉の未製品1点が、末法遺跡（II次）では1号住居跡から凝灰岩質の石材で加工途中とみられる管玉1点と剥片類が出土し、周辺に該期の工房跡の存在が予測される。



- 1 松ノ尾
- 2 原野地
- 3 山宮地
- 4 行院堂
- 5 三保堂
- 6 御岳田
- 7 金の尾
- 8 米法
- 9 櫻田
- 10 菅羽
- 11 米草
- 12 万寿庵古墳
- 13 加牟那庵古墳
- 14 おてんぐさん古墳
- 15 三光寺山古墳
- 16 湯村山1号古墳
- 17 湯村山2号古墳
- 18 湯村山3号古墳
- 19 湯村山4号古墳
- 20 湯村山5号古墳
- 21 湯村山6号古墳
- 22 大平1号古墳
- 23 大平2号古墳
- 24 塩沢寺墓無名墳
- 25 大塚古墳
- 26 無名塚古墳
- 27 栗原塚古墳
- 28 証文塚古墳
- 29 猪塚古墳
- 30 猪塚古墳
- 31 無名9号古墳
- 32 无名塚古墳
- 33 無名1号古墳
- 34 天神塚古墳
- 35 米塚古墳
- 36 米塚古墳
- 37 大塚古墳
- 38 大塚古墳
- 39 狐塚古墳 (雙葉町)
- 40 穴塚古墳
- 41 双葉1号墳
- 42 住生塚古墳
- 43 双葉2号墳
- 44 狐塚古墳 (双葉町)
- 45 竜玉1号墳
- 46 竜玉2号墳
- 47 竜玉3号墳
- 48 ニツ塚1号墳
- 49 ニツ塚2号墳
- 50 へび塚
- 51 西山1号墳
- 52 西山2号墳
- 53 西山3号墳
- 54 狐塚1号墳
- 55 狐塚2号墳
- 56 狐塚3号墳
- 57 中林塚
- 58 丸山古墳
- 59 四ツ石塚
- 60 形部塚古墳
- 61 阿日塚1号墳
- 62 阿日塚2号墳
- 63 阿日塚3号墳
- 64 阿日塚4号墳
- 65 阿日塚5号墳
- 66 阿日塚6号墳
- 67 片瀬塚
- 68 双葉3号墳
- 69 天狗塚古墳
- 70 湯村山塚
- 71 法泉寺山塚火台
- 72 和田塚山
- 73 山之神塚 (五輪部1墓)
- 74 土屋塚 (百部塚)
- 75 慈徳院五輪塚

第1図 松ノ尾遺跡と周辺の遺跡

金の尾遺跡（第Ⅳ・Ⅵ次調査）でも多くの遺物が出土しており、とくにⅣ次調査では本町で初めてとなる該期の周溝墓が2基確認されたことから、さらに周辺で新たな集落跡も今後発見される可能性が実に高い。

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でそれぞれ住居跡1軒がある。

末法遺跡（Ⅰ次）では1号住居跡から甕、壺、高坏、坏などが出土し、しかも器種と量も充実している。金の尾遺跡（Ⅳ次）1号住居跡や御岳田遺跡（Ⅰ次）2号住居跡からも甕、甑、坏、高坏などがみられる。

その他、遺構は確認されていないが松ノ尾遺跡の第Ⅱ次調査で該期の大型の有段高坏坏部2个体（口径約25cm、深さ約5.0cm）が出土していることから、周辺には該期の遺構・遺物が点在するようである。

なお、金の尾Ⅳ次調査の周溝墓群には二重口縁をもつ「壺形埴輪」を出土したものが1基存在する。

後期の甲府盆地北西部は、6世紀中頃から横穴式石室を有する後期古墳が築造されるようになる。

荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳4や県内で2番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳5の存在などからこの頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末～7世紀前半には町の南部を群集墳（千塚・山宮古墳群－甲府市、赤坂台古墳群－双葉・竜王など）が取り巻くようになる（第1図●印）。

敷島町内にも戦後間もない頃にはまだ4・5基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳29と大庭古墳30が存在するのみとなっている。

また、松ノ尾遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれた土砂に相当すると考えられる包含層中から須恵器の臑、金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、白玉、銅鏃、鉄鏃、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるようなものが出土している。

当時の人々が暮らしていた集落跡は、本町内では現在のところ松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、他では金の尾遺跡の第Ⅱ次調査で住居跡1軒が遺跡の北東端で唯一確認されているだけである。

松ノ尾遺跡は各次調査でこの時期の住居跡が常に発見されているが、周辺遺跡と比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅴ次調査では住居跡が複雑に重複してみつかり、とくに第Ⅱ次調査では一辺約7m、第Ⅴ次調査で一辺約8.5mと約8.0×6.0m、第Ⅶ次調査でも一辺約7.7mにもおよぶ大型の住居跡が発見されている。一方、荒川左岸の甲府市千塚に位置する榎田遺跡1でも古墳時代後期の住居跡が12軒発見され、規模が一辺約7m四方を測る大型のものもみられる。集落内におけるこのような大型住居跡の存在について今後その位置付けを考慮していく必要がある。

盆地北西部でのこうした勢力の繁栄を背景とし、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西に天狗沢瓦窯61が操業を開始するようになる。これは県内最古の瓦窯で、7世紀後半（白鳳期）とみられている。

この時期に併行する集落跡については、松ノ尾遺跡で近年徐々に住居跡が確認されてきており、また近隣では甲府市の榎田遺跡や音羽遺跡2で古墳時代後期～奈良時代に相当する住居跡が発見されている。

しかし、天狗沢瓦窯跡で焼かれ、その瓦が供給された寺院跡は残念ながらまだ発見されていないが、近年の調査で松ノ尾遺跡と村統遺跡④において瓦片が出土してきており、今後更なる調査が期待される。

奈良・平安時代 該期の遺構は町内で現在もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも総計100軒以上ある。

これまでの調査成果では、奈良時代から平安時代初め頃にかけては発見される遺構も未だ少ないが、平安時代中頃～末頃にかけては急激に遺構数も増加し該期の集落跡が主体を占めている傾向にある。

松ノ尾遺跡①は7回の調査でこれまでに住居跡37軒と竪穴状遺構10基が確認され、周辺の三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でもその広がりや分布がみられる。

一方、町南部の北側では、原腰遺跡②、山宮地遺跡③などが上げられるほか村統遺跡④では調査面積は狭小であったが計36軒が確認され、詳細は今後の調査によるが大きな集落跡の様相を呈する。

この村統遺跡の南側には現在甲府から双葉へと横断する通称「山の手通り」が走っており、これは甲斐古道9筋の内の1つにあたる道筋で旧「穂坂道」に相当する。本来茅ヶ岳の麓を経由して甲府の塩部から長野県佐久の川上までを結ぶ甲斐と信州を繋ぐ古道であった。

各遺跡出土の遺物をみると、膨大な量の土器をはじめとし須恵器、灰釉陶器、陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品なども出土している。中でも松ノ尾遺跡では墨書土器や円面硯(4 個体分の破片)、そして銅製の帯金具や金銅製小仏像 2 軀が、また村統遺跡では銅製小仏像の台座が 1 軀出土していることなどが特筆される。銅製小仏像はその出土状態や共伴遺物、文様・鑄造方法などからおおよそ 11~12 世紀の所産とみられ、しかも現在県内の発掘調査で出土した 4 例のうち 3 例が本町で発見されたものとなっている。

一方、平安時代末頃になってくると青磁や白磁などの貿易陶磁器が出土する遺跡がみられるようになる。

中世 該期の明確な遺構が確認されているのは、松ノ尾遺跡①と山宮地遺跡③の 2 遺跡である。

松ノ尾遺跡は、第七次調査において一辺約 5.2 m、最深部約 40 cm を測り、堅穴内に人為的に石が敷き並べられた堅穴状石組遺構が 1 基発見され、周辺からは土師質土器や青磁片などが出土し、おそらく平安末~中世初頭の遺構とみられる。また、この石組遺構の周辺にはピット群が展開し、この内近接したピットから仏像の頭部にみられる螺髪 1 点が出土しており、今後これらの遺構・遺物から遺跡の性格を十分に検討していく必要がある。

山宮地遺跡では、近年 15・16 世紀代とみられる遺構や遺物が調査成果として上がっている。

第 1 次調査ではカワラケや古銭などが出土した堅穴状遺構 1 基や土坑などがあり、さらに第 2 次調査において堅穴状遺構 4 基、土坑 14 基が発見されている。とくに後者の 2 号堅穴状遺構からは全国でも初例とみられる数点の銅製仏具がまとまって出土した。

山宮地遺跡の東脇には前述の穂坂道と南北に直行して南北朝時代に「御嶽道」が発達するが、この古道は修験道の霊場であった金峰山信仰の登山口であったようである。この「御嶽道」と遺跡との位置関係、そして銅製品の内容から「御岳信仰」とのかかわりが推測される。

さらに、第三次調査ではカワラケと古銭が埋納された計 32 基にのぼる土壇墓群が検出され、本遺跡は極めて部分的な調査であるにもかかわらず中世遺構が広範囲に埋蔵されていることが明らかとなってきている。本遺跡の東隣には御嶽道を挟んで調査の手がこれまで一切入ったことのない大庭遺跡があり「甲斐国志」古蹟部には字大庭に武田家の家臣であった「土屋惣蔵昌恒」屋敷跡 66 が存在したという記述がみられ、山宮地、大庭遺跡周辺のこの一帯は本町における該期の様相を考えていく上でも今後重要な地域であるといえよう。

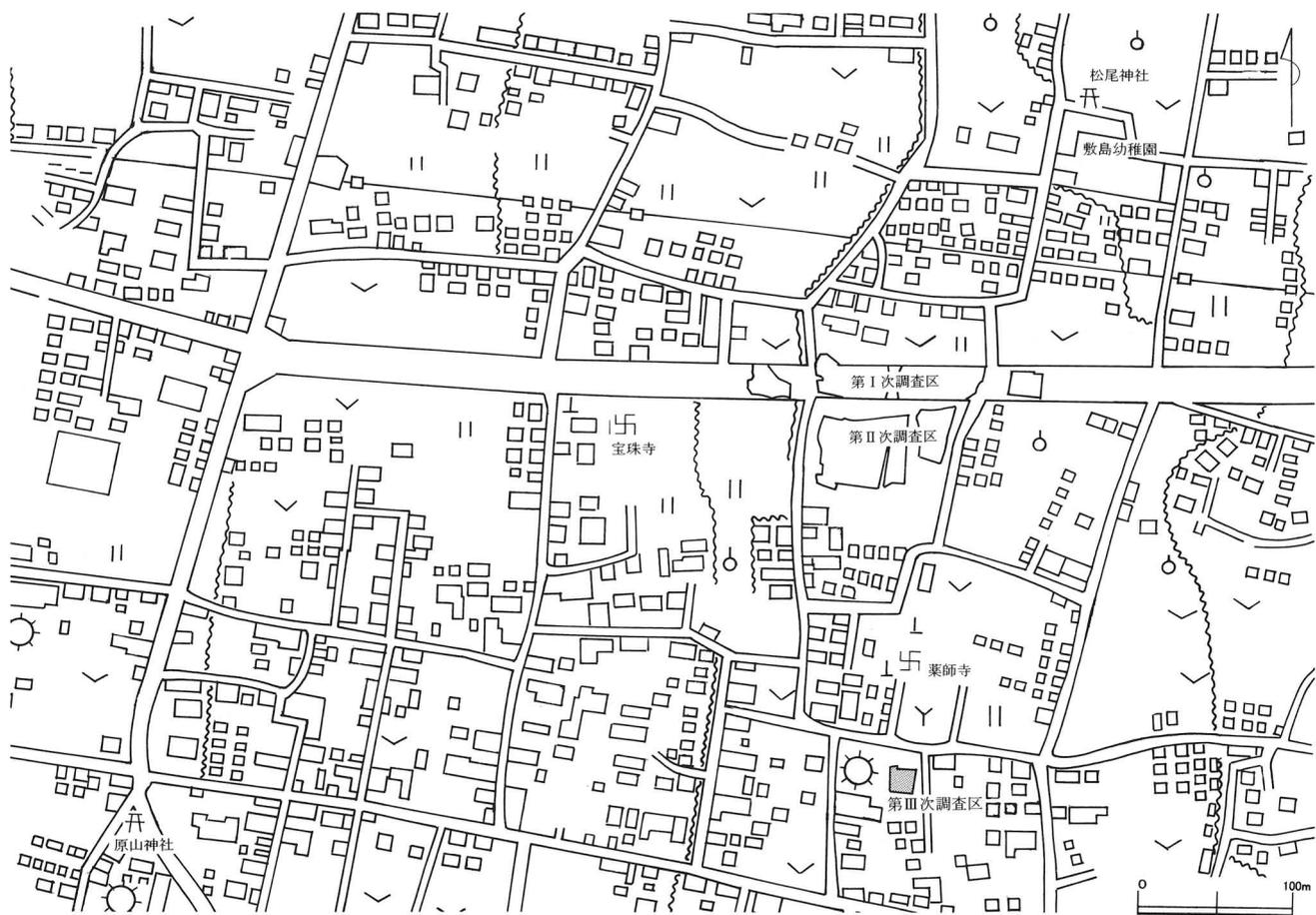
このように、近年の発掘調査ではこれまで判然としなかった中世の様相も徐々に明らかになりつつある。

明確な遺構はまだ判然としないが、これまで調査を行ってきた各遺跡では量的には僅少であるがカワラケや常滑、瀬戸・美濃などの陶器類、そして白磁、青磁などの貿易陶磁器などの出土が目立ってきており、今後盆地北西部地域における中世の様相を把握していくうえで注目される。

ほんの 10 年ほど前までは敷島町が所在する甲府盆地の北西部地域は調査の手がほとんど及ぶことがなかったことから、歴史の上では空白地帯ともなっていた。

しかし、以上にみてきたように町ではいまだに大規模な調査が数少ない状況であるにもかかわらず、内容の濃い成果が近年徐々に蓄積され始めてきている。

以下では、平成 10 年度におこなわれた松ノ尾遺跡第三次調査の成果について時期ごとに報告していく。



第2図 調査区位置図



第3図 遺構配置図

第2章 遺構と遺物

松ノ尾遺跡は平成13年度までに7ヶ所の調査がおこなわれてきている。ここに報告するⅢ次調査は、本遺跡包蔵地の南東端に位置し、ちょうど2 軀の仏像を出土した第1次調査地点から直線距離で真南へ約200 m 離れた場所でおこなわれた。

調査の結果、縄文時代住居跡1軒、古墳時代住居跡2軒、平安時代住居跡4軒、土坑2基、溝状遺構3条など調査面積が狭小であったにもかかわらず多くの遺構・遺物が出土している。

1. 縄文時代

現在最も開発が進んでいる敷島町の南部では、この時代の遺構は金の尾遺跡に偏在して多く発見されており、この松ノ尾遺跡でははじめての発見となった。

a. 7号住居跡（第4～6図、図版2）

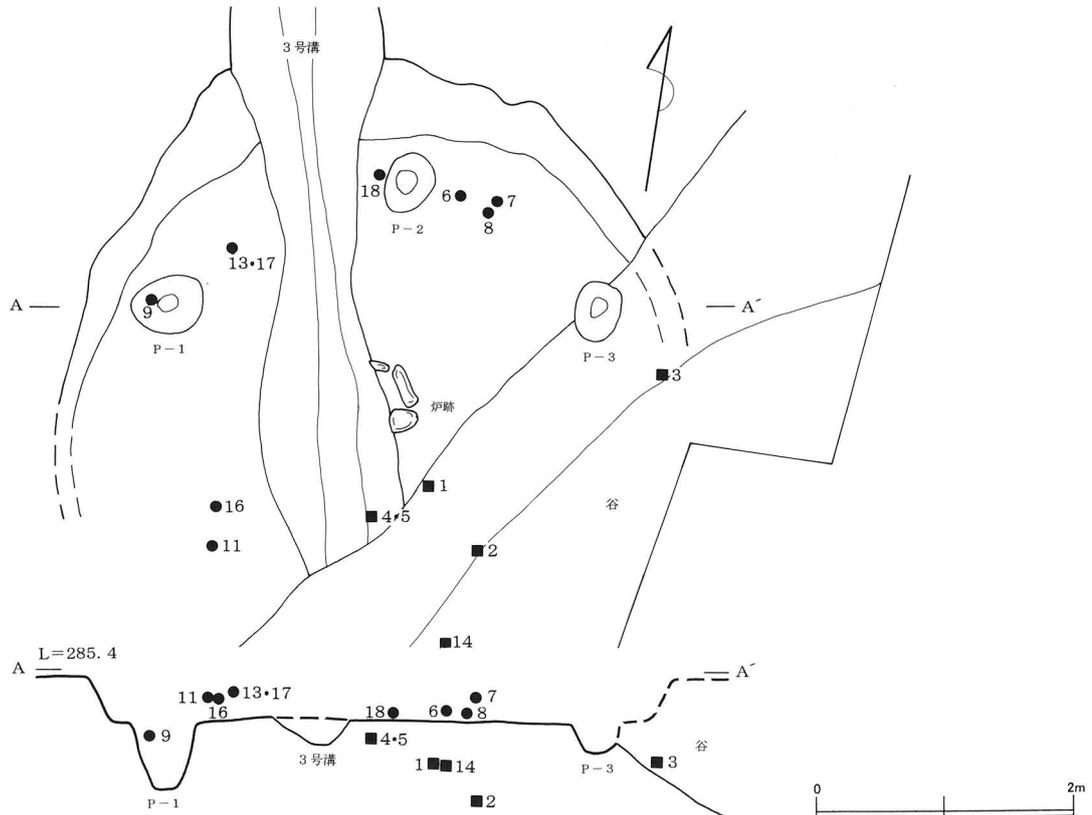
調査区東側C-2・D-2グリッドにまたがって発見された。住居跡中央は3号溝状遺構によって切られ、南東部は自然の谷状地形が入り込んでおり、遺構の南東半部は不明瞭である。

住居跡の規模は直径約5.0 mの円形を呈するとみられ、北西部で深さ約30 cmを測り壁は緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ水平で、とくに踏み固められたような硬い面は認められない。

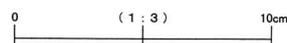
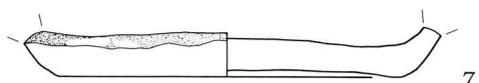
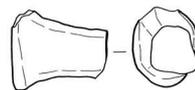
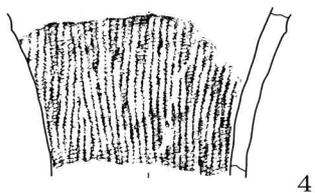
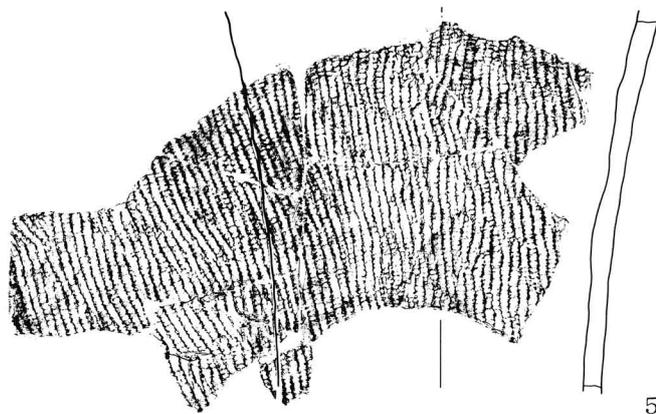
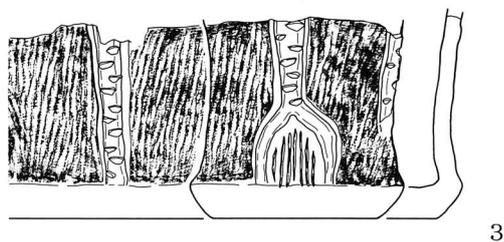
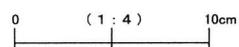
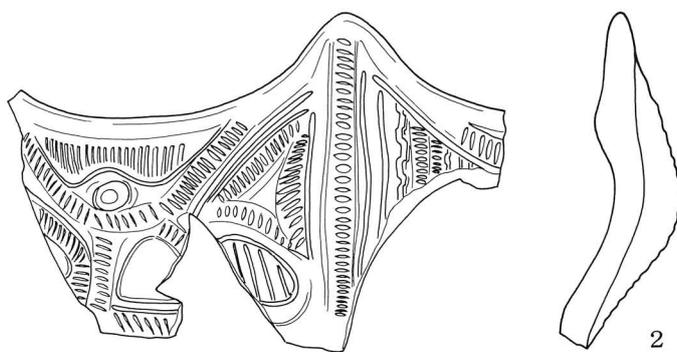
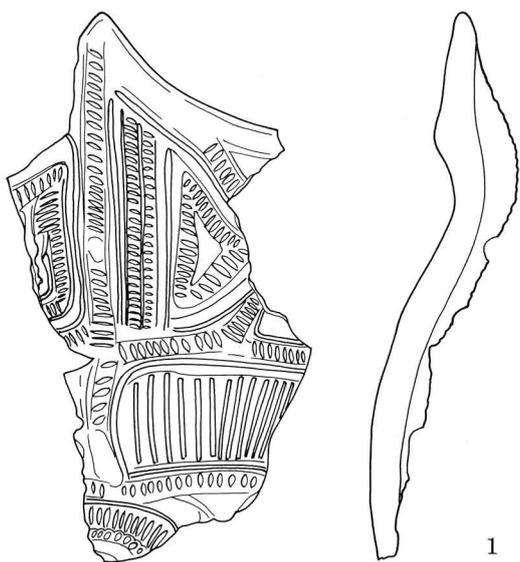
炉は、住居跡の規模と形状から床面のほぼ中央に位置していたと考えられるが、3号溝状遺構によって西側半分を攪乱されている。おそらく約35 cm大の扁平な石を四角に組んでいたのであろう。炉内には若干の焼土が含まれていたが、火床面等は確認できなかった。

柱穴は、北側の壁際に沿って3ヶ所(P-1～3)あり、直径約35～55 cmを測る。P-1は深さ約50 cmと最も深く、P-3は深さ約20 cmである。

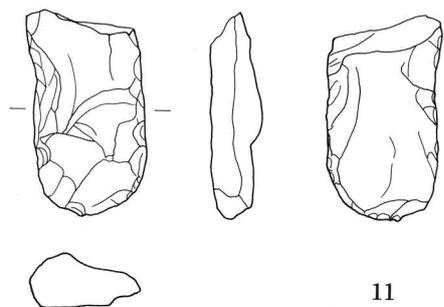
遺物は、深鉢(1～5)・器台形土器(6～8)・ミニチュア土器(9)・打製石斧(11～13・15～17)・磨製石斧(18)・横刃型石器(19)などが出土している。



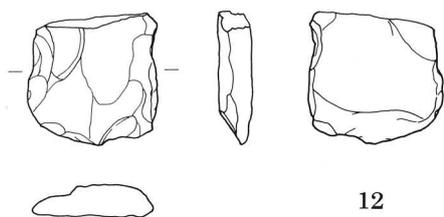
第4図 7号住居跡



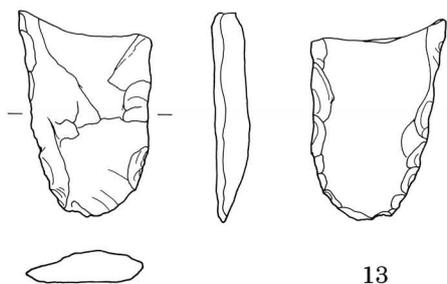
第5图 7号住居跡出土遺物(1)



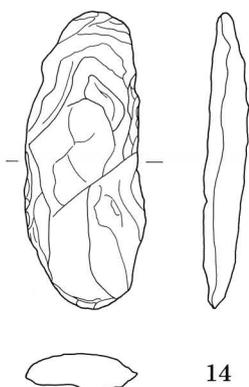
11



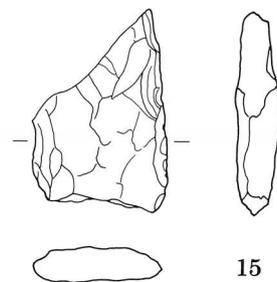
12



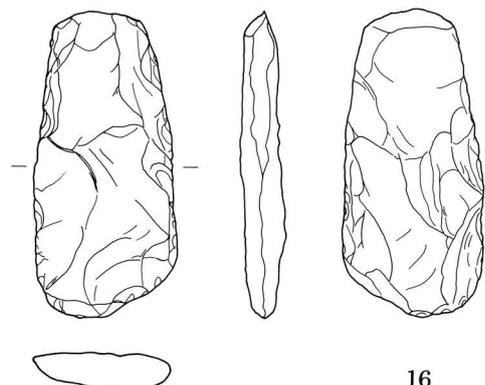
13



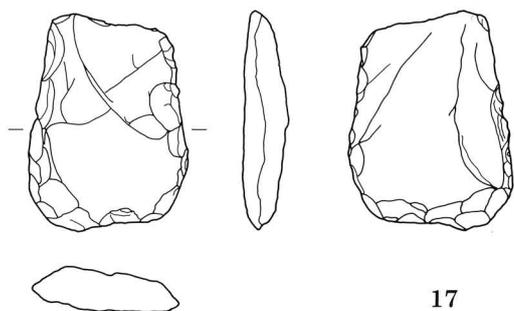
14



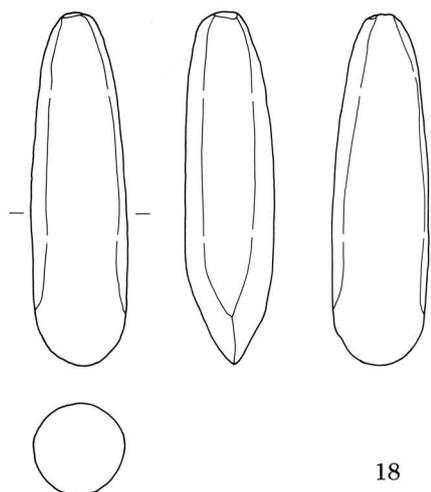
15



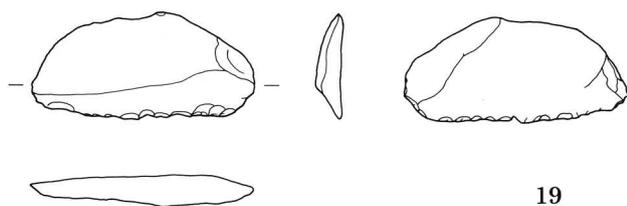
16



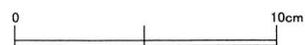
17



18



19



第6图 7号住居跡出土遺物(2)

土偶の脚部(10)は住居跡から北側のC-3グリッドで出たものであるが都合上ここに掲載した。

器台形土器6~8はP-2の東側で住居の北壁隅からまとまって出土した。7・8は床面上のほぼ同一レベルに並べて置かれたままとみられ、6は逆位で覆土中にやや浮いた状態であった。ミニチュア土器9はP-1内へ若干落ち込んでいた。磨製石斧はP-2の西側床面上から出土している。

本遺構の南東部には自然の谷状地形が存在し、遺物(1~3・14)はそこへ流れ落ち込むかのように分布するが、おそらく谷上に構築された床面が谷内へと長い年月で沈下したためと考えられる。

2. 古墳時代

本遺跡では第Ⅰ・Ⅱ次調査ですでに計13軒の古墳時代後期の住居跡が発見されており、今回さらに後期の住居跡2軒が検出された。

a. 1号住居跡 (第7・8図、図版3)

調査区の北東部に位置し、5号住居跡と重複して切られ、北西部には3号住居跡が隣接している。

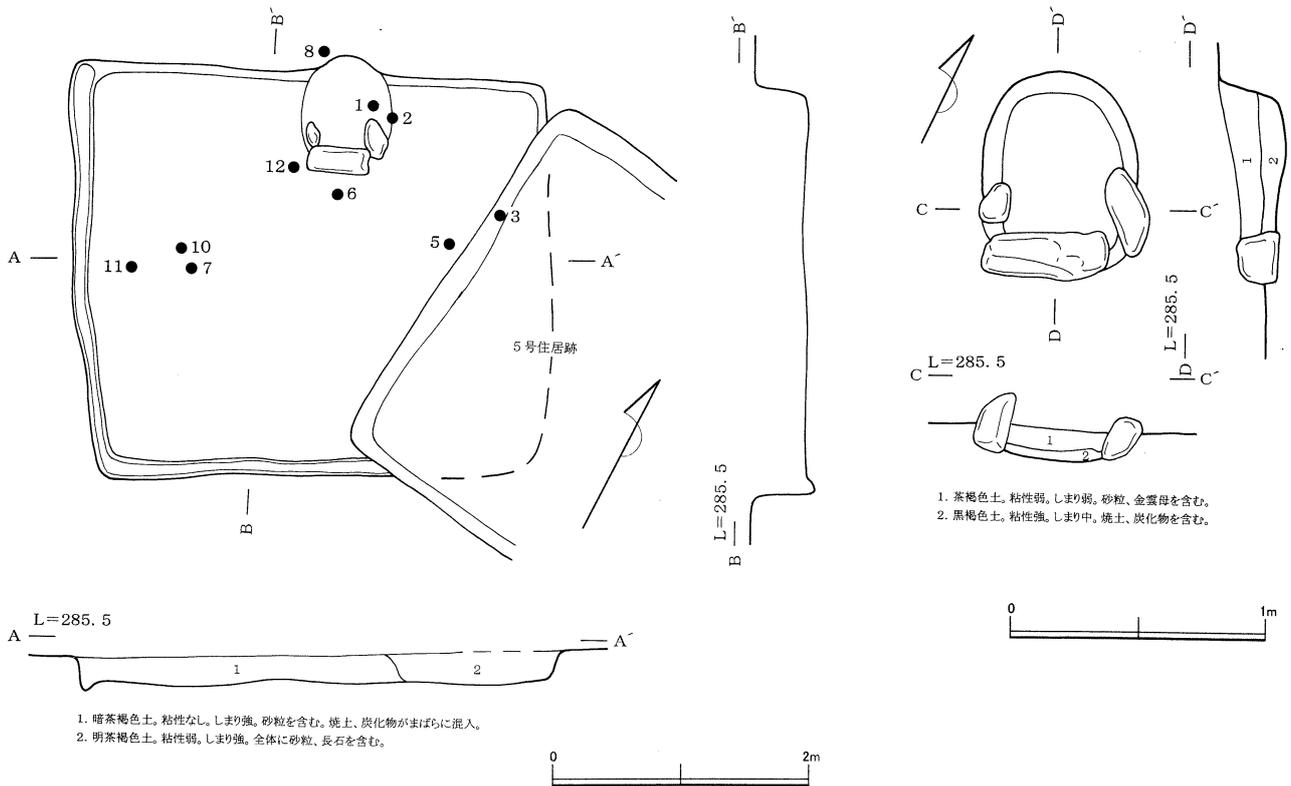
規模は、東西約3.7m、南北約3.2mの長方形を呈し、壁高は約20~40cmを測る。

壁はおよそ垂直に立ち上がり、床面はわずかに凹凸がみられる。また、西壁から南壁の際にかけて幅約15~20cm、深さ約8cmの壁溝が掘り込まれている。

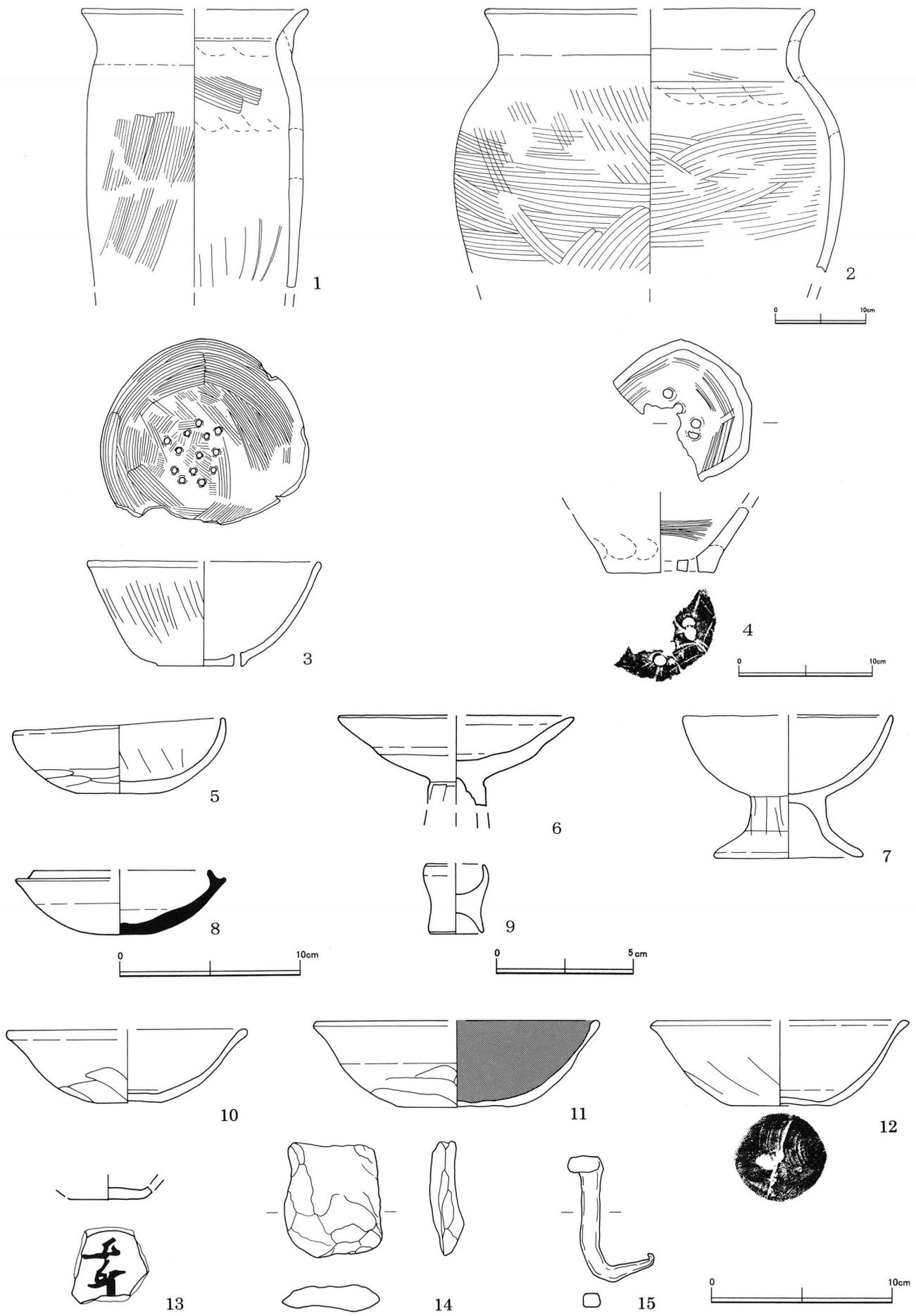
カマドは、住居跡北壁のほぼ中央に位置し、長軸約85cm、短軸約60cmで火床部の掘り込みはわずかにみられる。カマドはほとんど崩れていたが、元来炊口となる両袖部には長さ約25~30cm大の石を直立させ、天井石には長さ約50cm、幅約20cmの大型の石が組まれていたようである。

遺物は、甕(長胴甕1、球胴甕2)、甑3・4、坏5、高坏6・7、小型手捏土器9などがある。

甕1はカマド内、甕2はカマド東側覆土から出土し、甑3と坏5は住居跡東側床面に近いところから、高坏6は住居跡西側のやはり床面に近い位置からそれぞれ出土している。須恵器坏8は、カマド北東部のすぐ脇から出土している。



第7図 1号住居跡



第8图 1号住居跡出土遺物

なお、高坏 7 や坏 10~13 は覆土の最上層に分布し、本遺構の確認段階のものである。

b. 3号住居跡 (第9図、図版4)

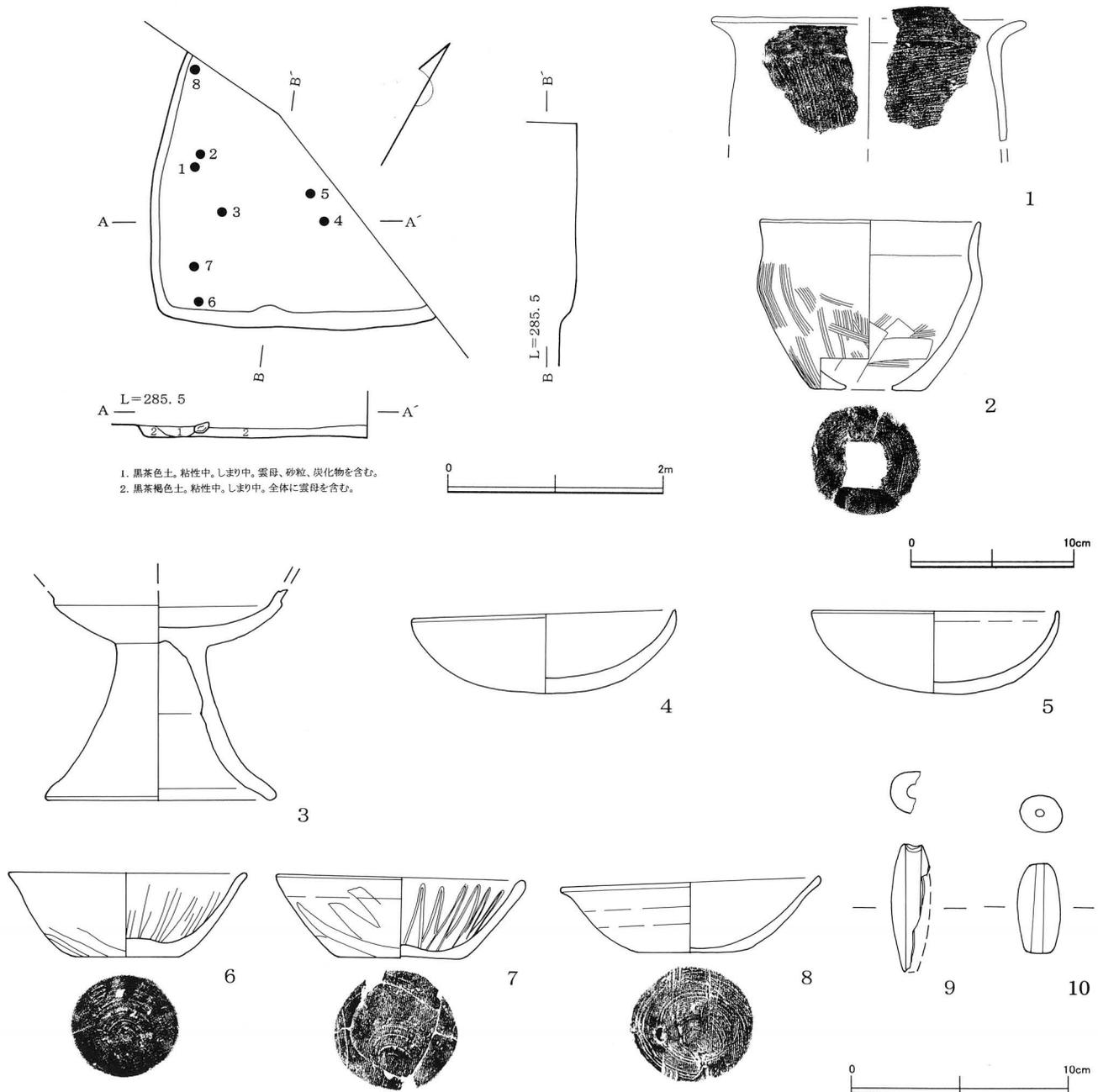
調査区の北部中央にあり、北東半部が調査区外となっている。周辺には1号住居跡や2・3号溝状遺構などが近接している。

確認可能な規模は東西約2.6m、南北約2.5mでおそらく方形を呈すると考えられる。深さは約10~15cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ水平である。

本住居跡にはとくに付随する施設等は確認されていない。

遺物は甕1、甑2、高坏3、坏4・5、土錘9・10などがある。また、6~8は平安時代の坏であるが、1号住居跡と同様に遺構確認段階に出土したものである。

甕1、甑2は住居跡西側の覆土中から、高坏3は甕1、甑2よりもやや高い位置から出土している。坏4・5は住居跡中央よりからまとまって出土し、4はほぼ床面上、5は覆土中から出ている。



第9図 3号住居跡と出土遺物

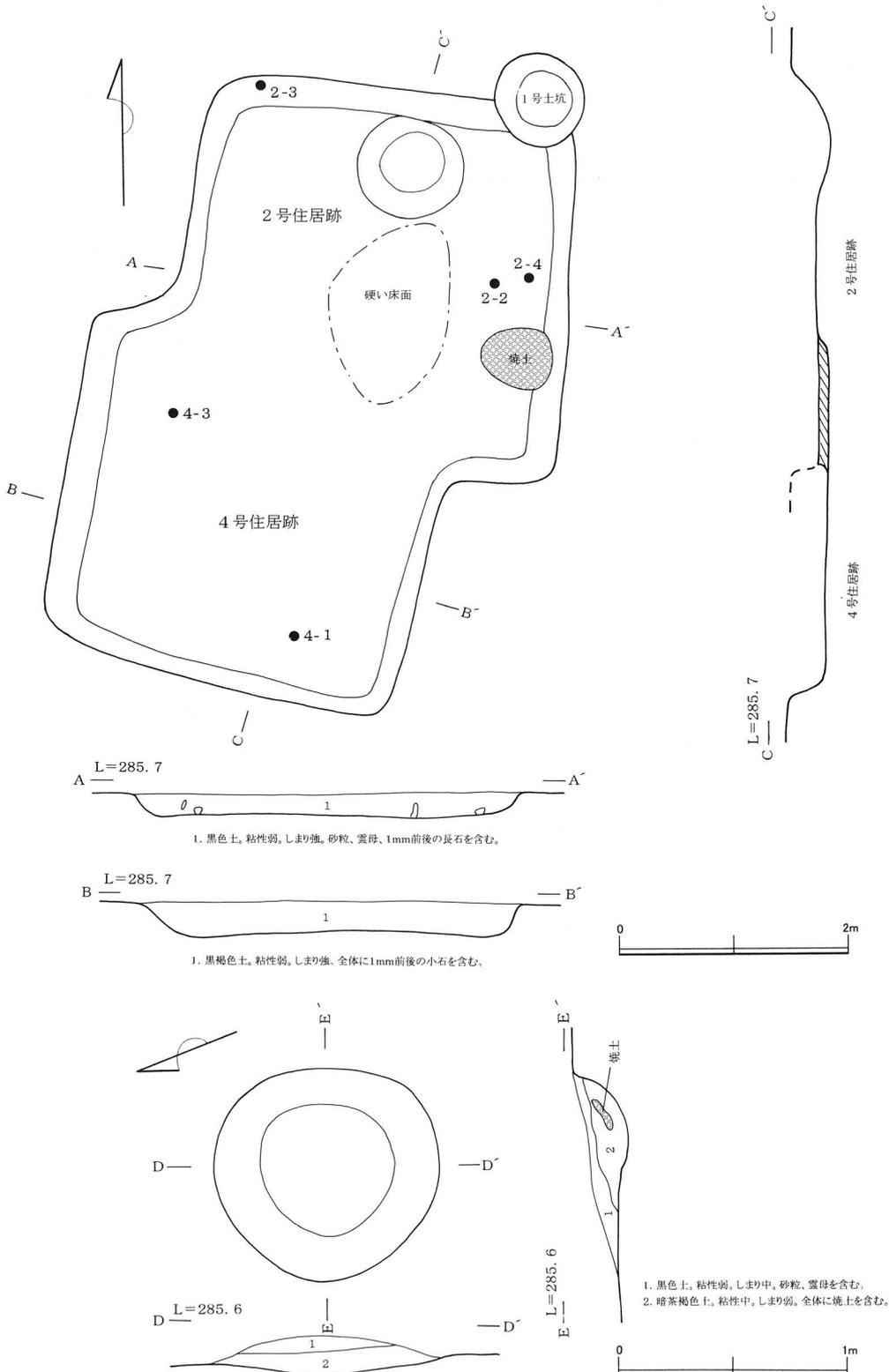
3. 平安時代

今回の調査で4軒の住居跡が発見された。

a. 2号住居跡 (第10・11図、図版5-1・2)

調査区南西部A-2・B-2に位置し、4号住居跡および1号土坑と重複関係にある。

規模は、東西約3.4m、南北約3.5mの方形を呈し深さ約25cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面は緩やかな凹凸があり、中央から南部にかけて硬く踏みしめられたような硬い面が広がる。



第10図 2・4号住居跡

北壁中央際には焼土を含んだ浅い土坑状の掘り込みがあり、また、東壁中央からやや南側にも焼土のまとまりがみられた。本来、住居跡のカマドが存在していたと思われるが判然としない。

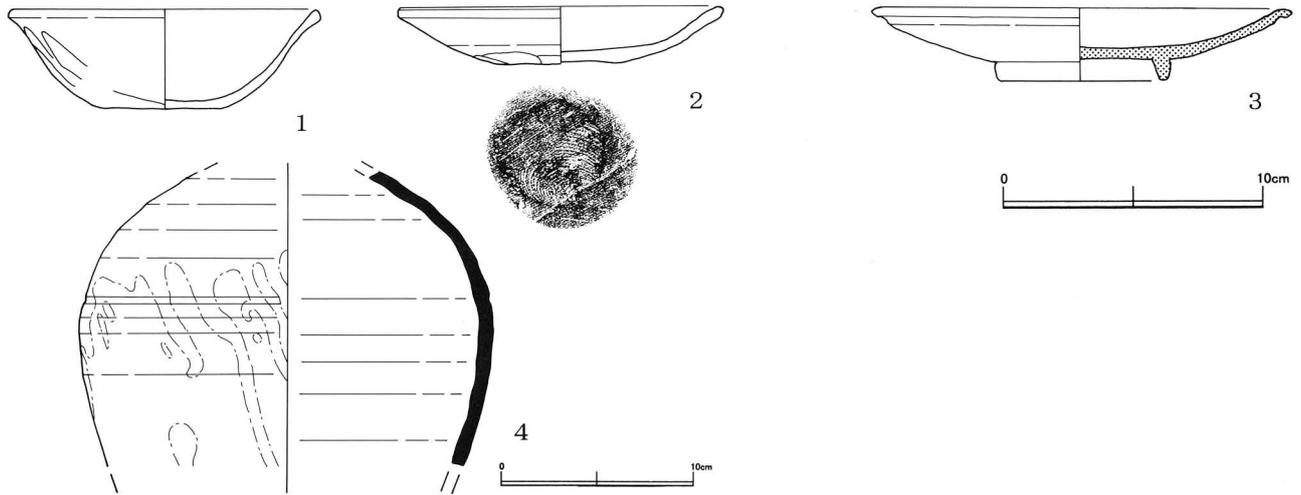
遺物は、坏 1、皿 2、灰釉陶器の皿 3、灰釉陶器の壺 4 などが出土している。皿 2 と灰釉陶器の壺 4 は東部壁際の焼土が検出された北側ほぼ床面上にあり、そして灰釉皿 3 は北西部コーナー隅部の床面上から出土している。

b. 4号住居跡 (第10・12図、図版5-1・3)

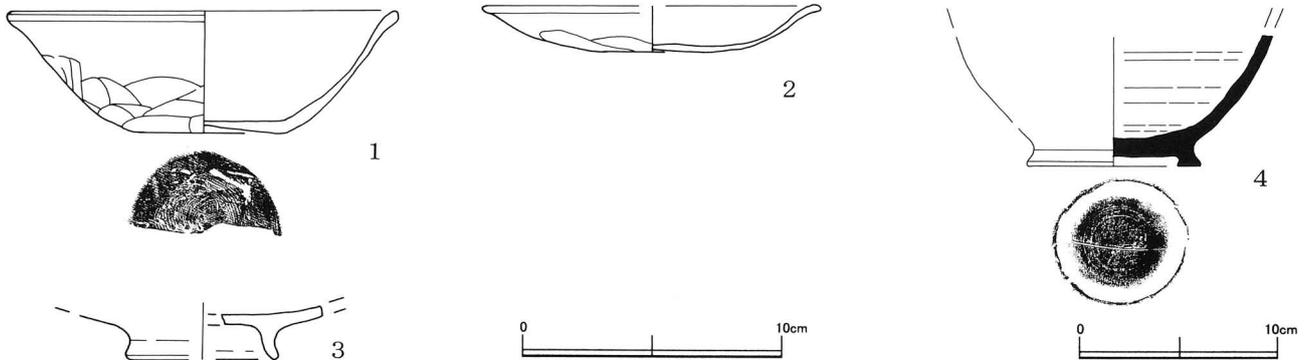
調査区南西部 A-1・2 に位置し、2号住居跡と重複し切られている。南東側に6号住居跡、1・2号溝状遺構が近接している。

規模は東西約 3.3 m、南北約 3.1 m で方形を呈し、深さ約 30~35 cm を測る。壁は全体的に緩やかに立ち上がる。本遺構はとくに施設等はみられなかった。

遺物は、坏 1、皿 2、黒色碗 3、須恵器の壺 4 などが出土している。1 は南東部から、3 は北西部のそれぞれ床面に近い位置から出土している。



第 11 図 2号住居跡出土遺物



第 12 図 4号住居跡出土遺物

c. 5号住居跡 (第13・14図、図版6)

調査区北東部D-3に位置し、1号住居跡の東側を切っている。

規模は東西約3.4m、南北約3.2mの方形を呈し、深さ35~50cmで壁は緩やかに立ち上がる。

住居跡の南には壁に平行するように東西に幅約90cm、深さ約15cmの落ち込みがみられ、さらに東側では幅約180cmと急激に幅広くなる。この遺構に伴う施設の一部であるのかどうかは不明である。

カマドは、明確にその形を残すものはないが東壁中央やや南から焼土と灰がまとまった箇所が認められ、おそらく本住居跡の東カマドであったと考えられる。

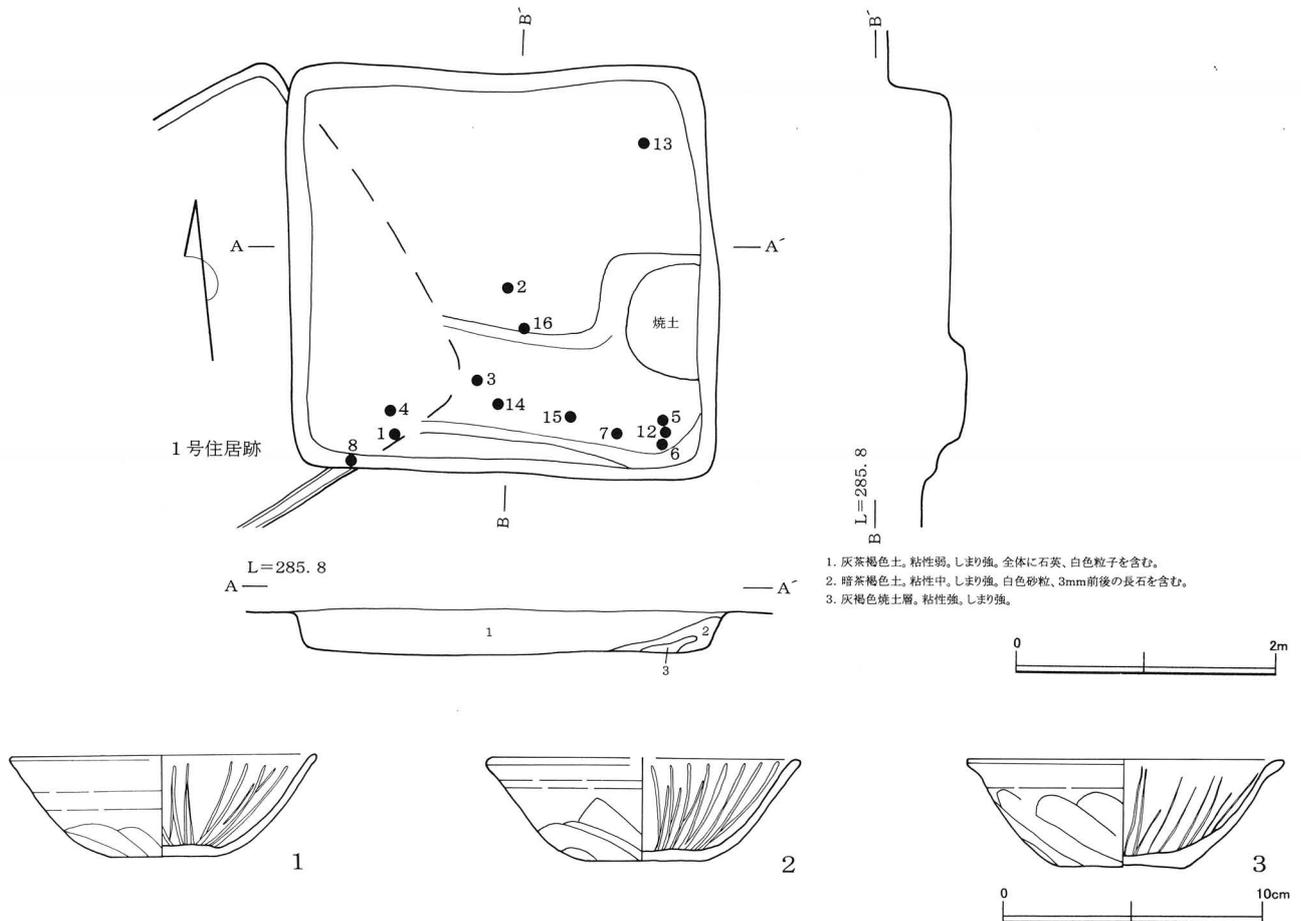
遺物は、坏1~11、皿12~15、須恵器の甕16、鉄製品17など遺物が豊富である。坏類は住居跡の南側に偏在しており、このうち坏1・2・4・8と墨書土器10、須恵器の甕16は遺構確認段階の最上層から、坏7は南東部の覆土中層からそれぞれ出土している。坏3は南側床面上、坏5・6は南東部覆土下層にあり皿12とまとまって出ている。

また、皿13は住居跡北東部、皿15は南東部のそれぞれ覆土中層に分布している。

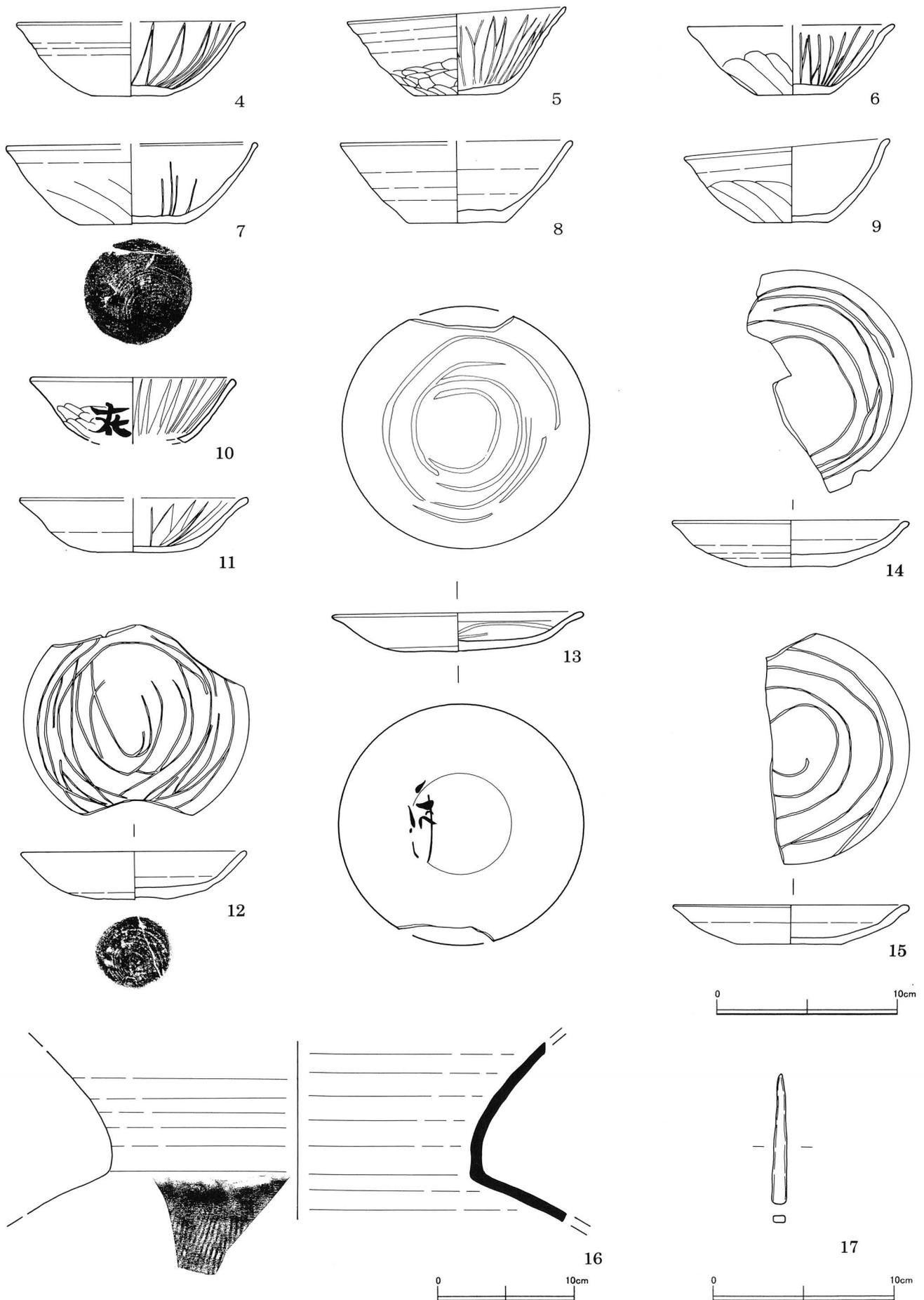
d. 6号住居跡 (第15図、図版7-1~3)

調査区南西部A-1・B-1に位置し、西側を2号溝状遺構、住居跡中央を東西に1号溝状遺構が走り、本遺構はこれらの溝状遺構によって切られている。

住居跡南部は調査区外となっており、確認された規模は、東西約3.2m、南北約3.3mで南北に長軸をもつ長方形を呈している。深さは約40cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。



第13図 5号住居跡と出土遺物 (1)



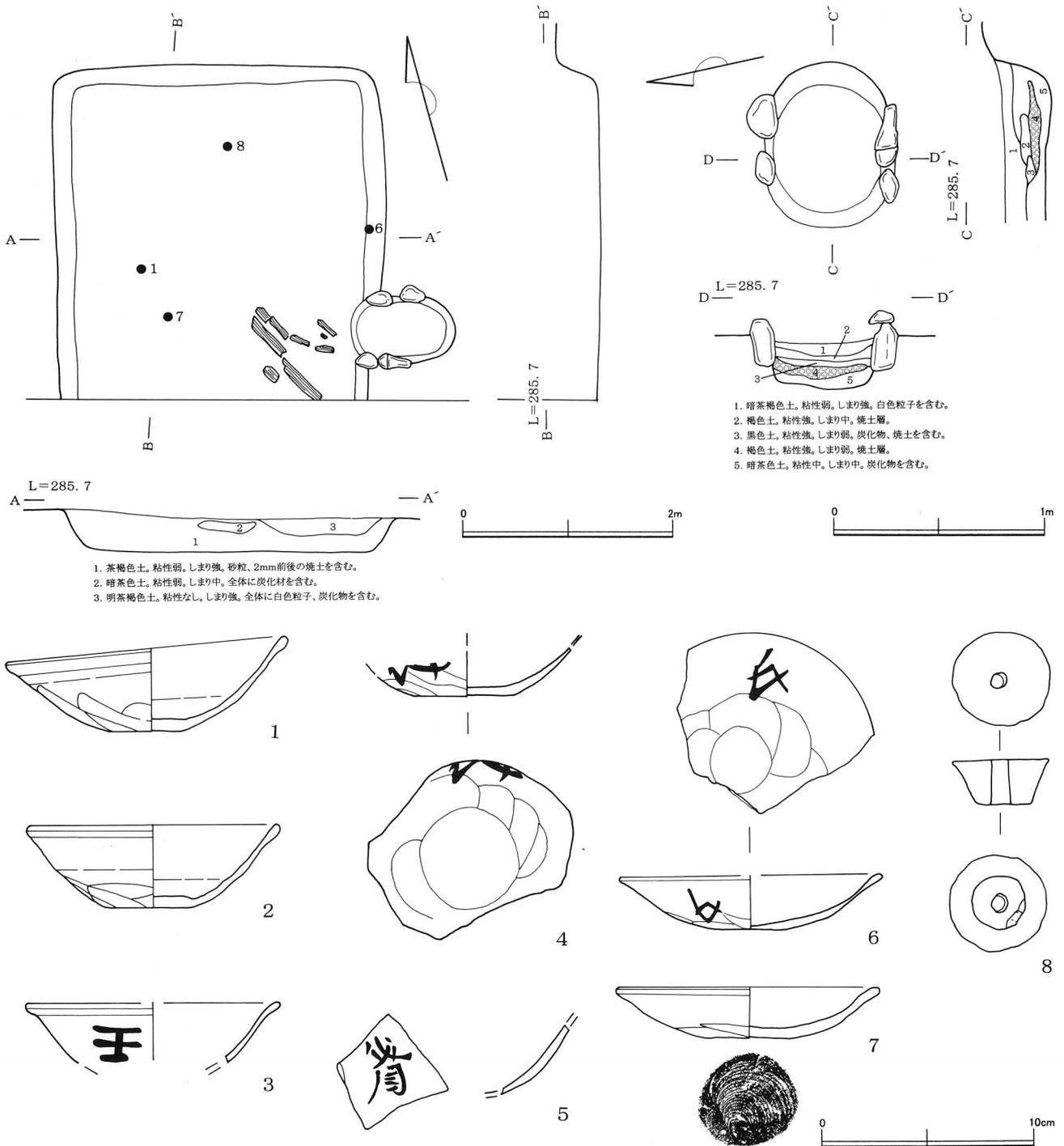
第14图 5号住居跡出土遺物(2)

東壁の南にはカマドが確認され、長軸約 80 cm、短軸約 70 cm を測る。そして、長さ約 30 cm 弱の扁平な石を両袖に 2 個ずつ直立させてカマドを構築している。なかには焼土および炭化物が充満していた。カマドの正面には、住居跡の柱材とおもわれる良好な炭化材が床面上から検出された。

遺物は、坏 1~5、皿 6・7、紡錘車 8 があり、このうち坏 3~5、皿 6 は墨書土器で比較的多く出土している。

坏 1 と皿 7 は住居跡中央からやや西から出ているが、1 は床面付近、7 は覆土上層にある。

また、皿 6 はカマド北部の西壁に近い覆土上層から出ている。紡錘車 8 は住居跡北側の覆土中層から出土した。



第 15 図 6 号住居跡 S 出土遺物

1号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第8図1	土師器	長胴壺	—	(16.5)	—	長石、赤色粒子	暗茶褐色	良	口辺部と頸部横ナデ。外面胴部縦位ハケ目。内面体部下半縦位ヘラ整形。	3-3
第8図2	土師器	丸胴壺	—	(24.0)	—	長石、石英、金雲母、赤色粒子	茶褐色	良	口辺部から頸部横ナデ。外面不規則な櫛描き。内面横方向の櫛目と指頭痕。	3-3
第8図3	土師器	甌	8.0	(17.3)	6.4	長石、石英	茶褐色	良	底部直径6mmの円孔13ヶ所。内面横方向の櫛目。外面縦方向の櫛目。	3-3
第8図4	土師器	甌	—	—	(8.0)	細、長石	淡茶色	良	底部直径8mmの円孔。外面下部指頭痕。外面底部ヘラ整形。内面横位ハケ目。	3-3
第8図5	土師器	坏	4.2	11.5	4.4	緻密	茶褐色	良	内面体部縦位ヘラ整形。外面底部～体部横方向ヘラ削り。外面底部ハケ目。	3-3
第8図6	土師器	高坏	—	(13.0)	—	緻密	暗茶色	良	内外面坏部横位ヘラ磨き。外面脚部縦位ヘラ整形。	3-3
第8図7	土師器	高坏	8.0	11.4	7.9	緻密	暗茶色	良	内外面坏部横位ヘラ磨き。外面脚部縦位ヘラ削り。外面裾部横位ヘラ磨き。	3-3
第8図8	須恵器	坏	3.4	(9.8)	—	粗、小石、石英	外面 淡白茶色 内面 灰白色	良	ロクロ整形。	3-3
第8図9	土師器	ミニチュア土器	1.6	2.1	2.0	長石、金雲母	茶褐色	良	高坏。全体に横ナデ仕上げ。	3-3
第8図10	土師器	坏	4.9	15.7	5.6	細。赤色粒子	外面 淡茶色 内面 黒色	良	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位ヘラ削り。底部回転糸切り後、ヘラ整形。ロクロ右回転。	3-3
第8図11	土師器	坏	4.1	13.0	3.9	緻密	外面 暗茶色 内面 淡茶色	良	口辺部横ナデ。外面底部と体部下半ヘラ削り。ロクロ右回転。	3-3
第8図12	土師器	坏	4.8	13.6	5.6	緻密	橙褐色	良好	口縁部横ナデ。外面体部下半斜位のヘラ削り。底部回転糸切り後、ヘラ整形。ロクロ右回転。	3-3
第8図13	土師器	坏	—	—	4.0	赤色粒子、金雲母	茶褐色	良好	底部糸切り後、ヘラ調整。底部墨書。	
No.	器種	器形	計測値 (cm)			石質	備考		図版	
			最大長	最大幅	最大厚					
第8図14	石器	打製石斧	6.5	5.4	1.7	砂岩				
No.	器種	器形	計測値 (cm)			備考		図版		
			最大長	最大幅	最大厚					
第8図15	鉄製品		7.1	1.0	0.8					

2号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第11図1	土師器	坏	3.9	12.05	4.8	細。赤色粒子	茶褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位ヘラ削り。	5-2
第11図2	土師器	皿	2.3	12.4	4.5	緻密。赤色粒、石英	暗茶褐色	良好	外面底部外周横位ヘラ削り。底部糸きり痕。	5-2
第11図3	灰釉陶器	高台付皿	3.0	15.6	6.5	緻密・硬質	淡灰色	良好	内面に淡緑色の自然釉。	5-2
第11図4	灰釉陶器	壺	15.6	—	—	緻密	淡灰色	良好	肩部外面に自然釉。	5-2

3号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第9図1	土師器	壺	—	(19.0)	—	金雲母、石英、長石	暗茶褐色	良	外面体部縦位ハケ目。内面体部横位ハケ目。	4-2
第9図2	土師器	甌	10.7	13.5	6.5	長石、金雲母	暗茶褐色	良好	底部直径2.8cmの円孔。外面縦位ハケ目。内面ハケ後、ヘラ調整。外面底部ハケ目。	4-2
第9図3	土師器	高坏	(10.0)	—	10.3	砂粒	黒茶色	良	坏部内面横ナデ。胴部外面上部面取り。下部縦位ハケ目。脚部内面輪積み痕。	4-2
第9図4	土師器	坏	4.0	12.2	2.0	緻密。赤色粒子少。 金雲母	暗茶色	良好	内外面横位磨き。	4-2
第9図5	土師器	坏	3.9	11.5	1.5	緻密。赤色粒子	外面 黒褐色 内面 明褐色	良好	内外面横位磨き。	4-2
第9図6	土師器	坏	4.0	11.0	5.0	緻密。砂粒・赤色粒子	茶褐色	良好	外面体部下半斜位ヘラ削り。内面体部放射状暗文。ロクロ右回転。	4-2
第9図7	土師器	坏	3.8	11.3	5.9	緻密。長石、石英、赤色粒子	暗茶褐色	良	内面体部放射状暗文。外面体部下半斜位ヘラ削り。底部糸切り後ヘラ調整。	4-2
第9図8	土師器	坏	3.6	12.0	5.4	緻密。長石、石英、赤色粒子	茶褐色	良	外面体部に稜。底部糸切り痕。	4-2
No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			長軸	短軸						
第9図9	土製品	土錘	6.05	1.85	—	緻密	橙淡茶色	良好	中央部最大径。表面磨き。直径6.5mmの円孔。	4-2
第9図10	土製品	土錘	4.2	1.95	—	細。砂粒、石英	茶褐色	良好	中央部最大径。先端部面取り。直径4mmの円孔。	4-2

第1表 住居跡出土遺物観察表(1)

4号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第12図1	土師器	坏	4.9	14.9	5.6	緻密、赤色粒子	外面 暗茶色 内面 黒色	良好	内黒土器。体部下半へラ削り。底部外周へラ整形、糸切痕。	5-3
第12図2	土師器	皿	1.8	12.6	4.6	緻密、赤色粒子	外面 橙褐色 内面 暗茶色	良好	口縁部横ナデ。外面底部斜位へラ削り。ロクロ右回転。	5-3
第12図3	土師器	碗	—	—	(5.7)	緻密。赤色粒子	外面 淡茶色 内面 黒色	良好	内黒土器。内面渦巻状暗文。高台部横ナデ。	5-3
第12図4	須恵器	壺	(6.8)	—	8.6	緻密、長石。硬質	外面 暗灰色 内面 明灰茶色	良好	底部貼付高台。ロクロ右回転。高台部へラ整形。外面底部線刻(窰印?)。	5-3

5号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第13図1	土師器	坏	4.0	11.6	4.2	緻密、赤色粒子	茶褐色	良	口辺部横ナデ。内面体部放射状暗文。外面底部と体部下半へラ削り。ロクロ右回転。	6-2
第13図2	土師器	坏	4.1	11.8	4.7	緻密。赤色粒子、長石	外面 明橙褐色 内面 淡茶色	良	外面体部下半斜位へラ削り。口辺部横ナデ。外面底部墨痕。内面体部放射状暗文。	6-2
第13図3	土師器	坏	4.3	12.1	5.0	砂粒、石英、赤色粒子	淡茶褐色	良好	外面体部下半斜位へラ削り。内面体部放射状暗文。	6-2
第14図4	土師器	坏	4.3	12.6	4.35	緻密。赤色粒子	赤褐色	良好	外面体部下半斜位へラ削り。口辺部横ナデ。内面体部放射状暗文。	6-2
第14図5	土師器	坏	4.9	12.0	4.4	緻密。長石、赤色粒子	橙褐色	良好	外面体部下半へラ削り。内面体部放射状暗文。底部へラ整形。	6-2
第14図6	土師器	坏	3.9	11.0	4.2	細。長石、赤色粒子	明橙褐色	良	外面体部下半斜位へラ削り。内面体部放射状暗文。外面底部へラ整形。口辺部横ナデ。	6-2
第14図7	土師器	坏	4.5	13.5	6.0	緻密。赤色粒子	明茶褐色	良	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へラ削り。内面体部放射状暗文。底部糸切り後、へラ整形。ロクロ右回転。	6-2
第14図8	土師器	坏	4.6	12.6	5.4	緻密。赤色粒子	橙褐色	良	口辺部横ナデ。	6-2
第14図9	土師器	坏	4.8	13.1	5.6	緻密。赤色粒子	橙褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へラ削り。底部へラ整形。	6-2
第14図10	土師器	坏	(3.8)	11.4	(5.6)	長石、赤色粒子。	明茶色	良好	口辺部横ナデ。底部へ体部下半斜位へラ削り。底部欠損。	6-2
第14図11	土師器	坏	3.1	(12.6)	5.0	細。赤色粒子、雲母	明茶色	良好	外面口辺部横ナデ。内面体部放射状暗文。底部へラ調整。	6-2
第14図12	土製品	皿	2.7	12.2	4.0	緻密。赤色粒子	赤褐色	良好	内面渦巻状暗文。外面下半へラ削り。	6-2
第14図13	土師器	皿	2.1	13.5	4.0	長石。金雲母	明茶色	良好	内面横位暗文。底部へラ整形。外外面墨書。	6-2
第14図14	土師器	皿	2.6	(13.6)	5.0	細。赤色粒子	赤褐色	良好	内面に渦巻状暗文。内外面線刻。	6-2
第14図15	土師器	皿	2.2	13.0	6.0	緻密。赤色粒子、金雲母	橙褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半横位へラ削り。内面渦巻状暗文。	6-2
第14図16	須恵器	大甕	(13.5)	—	—	緻密	灰茶色	良好	外面肩部自然釉。	6-2
No.	器種	器形	計測値 (cm)			備	考	図版		
			最大長	最大幅	最大厚					
第14図17	鉄製品		7.3	0.8	0.4	一部欠損				

6号住居跡出土遺物

No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			器高	口径	底径					
第15図1	土師器	坏	4.6	13.4	3.5	細。赤色粒子、長石	橙褐色	良好	外面体部下半斜位へラ削り。底部へラ調整。外面口辺部横ナデ。	7-3
第15図2	土師器	坏	4.05	11.8	4.0	緻密。赤色粒子、長石、雲母	茶褐色	良好	外面体部下半斜位へラ削り。底部へラ調整。	7-3
第15図3	土師器	坏	—	(12.0)	—	細。長石	茶褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部墨書。	7-3
第15図4	土師器	坏	—	—	4.8	長石。金雲母、赤色粒子	明茶色	良好	外面体部下半斜位へラ削り。底部回転糸切り後、へラ整形。外面体部墨書。	7-3
第15図5	土師器	坏	—	—	—	長石	茶色	良好	外面体部へラ削り。外面体部墨書。	7-3
第15図6	土師器	皿	2.6	(12.8)	3.2	細。長石、赤色粒子、金雲母	茶色	良好	底部へ体部へラ削り。口辺部ロクロナデ。外面体部墨書。	7-3
第15図7	土師器	皿	2.6	12.6	4.2	細。長石・石英・赤色粒子	茶褐色	良好	外面体部下半斜位へラ削り。底部糸切痕。	7-3
No.	器種	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
			長径	短径	厚さ					
第15図8	土製品	紡錘車	4.6	2.1	2.2	緻密	茶褐色	良好	最大径9mmの円孔。丁寧なへラ磨き。	7-3

第2表 住居跡出土遺物観察表(2)

7号住居跡出土遺物

No.	部位	文様・調整	胎土	色調	焼成	図版
第5図1	口縁部	口縁部内湾。刻みの施された隆帯。空間に刻みと沈線による文様。	粗、白色粒子、長石、石英、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図2	口縁部	口縁部内湾。刻みの施された隆帯。空間に刻みと沈線による文様。	粗、白色粒子、長石、石英、黒雲母	茶褐色	良	2-4
第5図3	胴部～底部	地文RL縄文。交互刻みによる4単位の縦位隆帯。	粗、白色粒子、石英、金・黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図4	胴部	地文RL縄文。	粗、白色粒子、石英、金雲母	赤茶褐色	良	
第5図5	胴部	地文RL縄文。	粗、白色粒子、石英、黒雲母	赤茶褐色	良	
第5図6	底部	大型深鉢の底部。破損割れ部は研磨。	粗、白色粒子、金雲母、赤色粒子	黒褐色	良好	2-4
第5図7	底部	大型深鉢の底部。破損割れ部は研磨。	粗、白色粒子、長石、黒雲母	赤褐色	良	2-4
第5図8	底部	大型深鉢の底部。破損割れ部は研磨。地文RL縄文。	粗、白色粒子、長石、金・黒雲母	褐色	良	2-4
第5図9	口縁～底部	ミニチュア土器。口縁部に直径約4mmの円孔を計7箇所穿孔。	粗、白色粒子、金・黒雲母	黒褐色	良	2-4
第5図10	土偶（脚部）	無文。	やや粗、長石、石英、黒雲母	褐色	良	2-4

No.	器種	計測値 (cm)			石質	備考	図版
		最大長	最大幅	最大厚			
第6図11	打製石斧	(8.1)	4.4	2.1	砂岩		2-4
第6図12	打製石斧	(5.3)	5.1	1.3	粘板岩		2-4
第6図13	打製石斧	(8.0)	5.0	1.4	砂岩		2-4
第6図14	打製石斧	(11.7)	4.7	1.6	粘板岩		2-4
第6図15	打製石斧	(8.0)	5.3	1.7	粘板岩		2-4
第6図16	打製石斧	12.2	5.6	1.6	砂岩		2-4
第6図17	打製石斧	(8.7)	6.2	1.7	砂岩		2-4
第6図18	磨製石斧	13.9	3.8	3.5	緑色凝灰岩		2-4
第6図19	スクレイパー	4.2	8.6	1.0	砂岩		2-4

第3表 住居跡出土遺物観察表(3)

4. 時期不明

a. 土坑（第16図、図版7-4・5）

計2基が発見された。

No.	位置	規模 (m)			形態	備考	図版
		長軸	短軸	深さ			
1号	B-2	0.83	0.80	0.10	円形		7-4
2号	B-2	0.97	(0.86)	0.18	楕円形		7-5

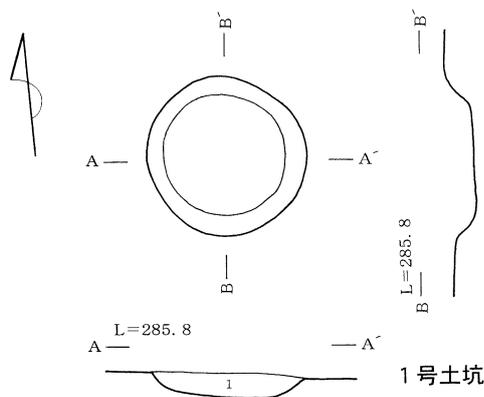
第4表 土坑一覧

b. 溝状遺構（第16図、図版8-1・2）

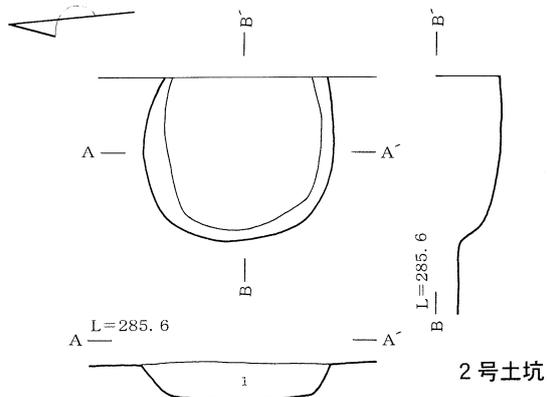
計3条が確認された。

No.	位置	規模 (m)			備考	図版
		最大長	幅	深さ		
1号	A-1・B-1～4	12.0	0.3～0.5	0.22	覆土中からフイゴの羽口片出土。	
2号	A～D-1	14.8	0.45～0.75	0.50		8-1
3号	C-2・3	6.0	0.3～0.78	0.60	坏が出土。	8-2

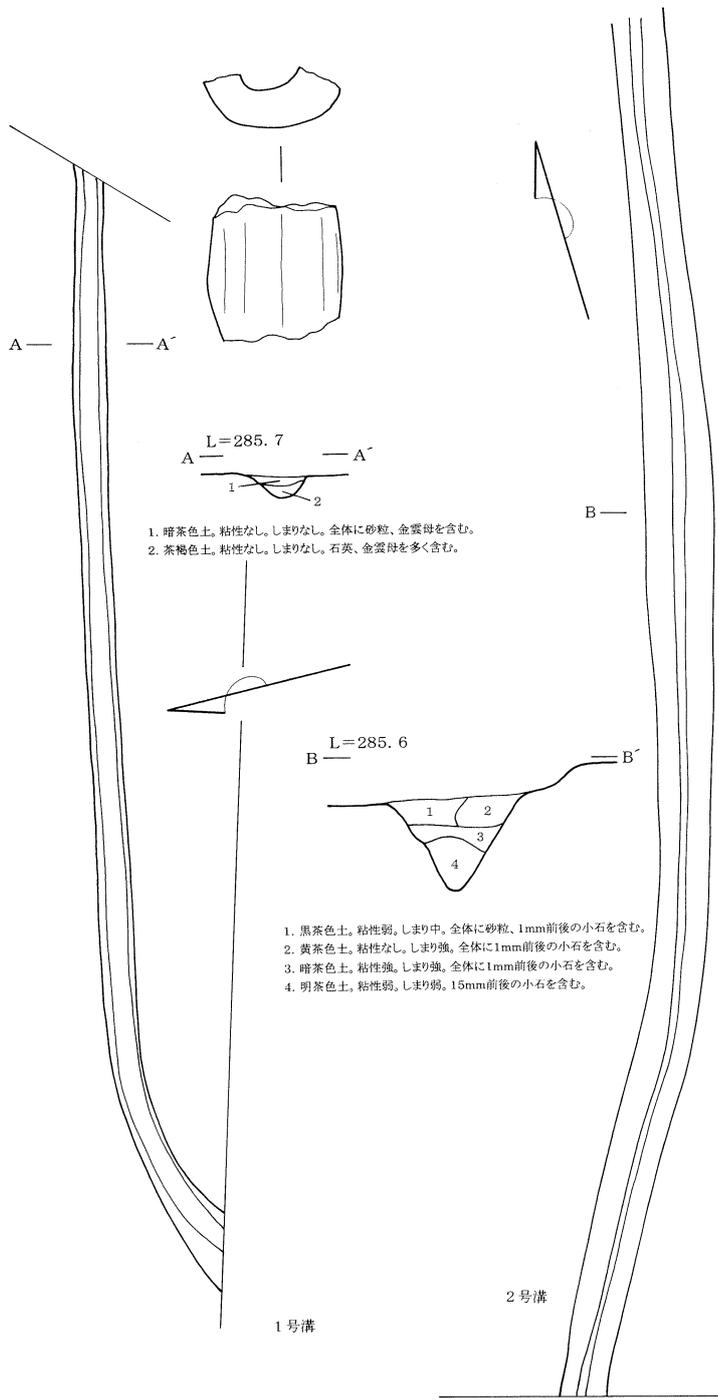
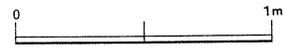
第5表 溝状遺構一覧



1. 茶褐色土。粘性なし。しまり強。砂粒、長石を含む。

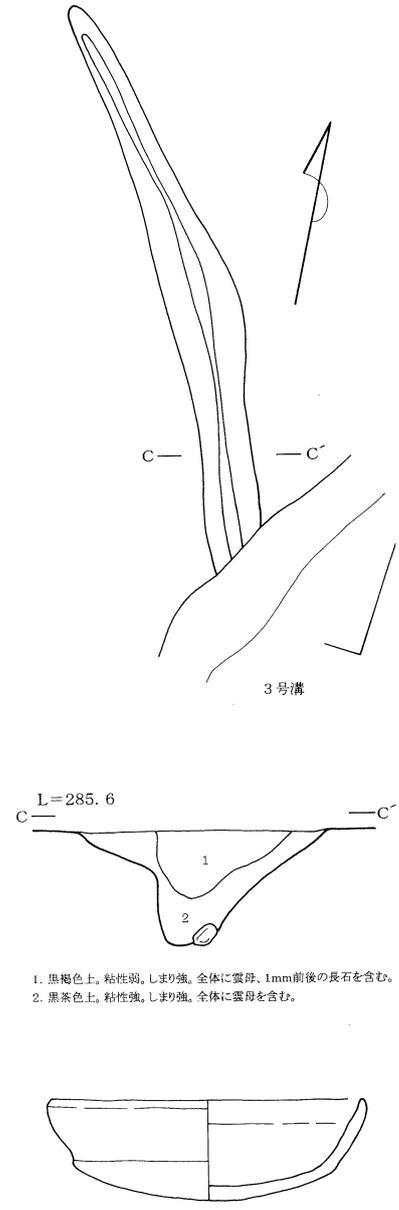


1. 暗茶褐色土。粘性弱。しまり中。砂粒、金雲母を含む。



1. 暗茶色土。粘性なし。しまりなし。全体に砂粒、金雲母を含む。
2. 茶褐色土。粘性なし。しまりなし。石英、金雲母を多く含む。

1. 黒茶色土。粘性弱。しまり中。全体に砂粒、1mm前後の小石を含む。
2. 黄茶色土。粘性なし。しまり強。全体に1mm前後の小石を含む。
3. 暗茶色土。粘性強。しまり強。全体に1mm前後の小石を含む。
4. 明茶色土。粘性弱。しまり弱。15mm前後の小石を含む。



1. 黒褐色土。粘性弱。しまり強。全体に雲母、1mm前後の長石を含む。
2. 黒茶色土。粘性強。しまり強。全体に雲母を含む。

第 16 図 1・2号土坑と1~3号溝状遺構

第3章 遺構外出土遺物

遺構外からは縄文、古墳、平安、中世の各時代の遺物が出土しており、その概要をみていきたい。

縄文時代 (第17図) 1~11は中期中葉で藤内~井戸尻式に相当する。12は後期の土器で、調査区内から1点だけ出土している。加曾利B式の口縁部であろう。

古墳時代 (第18図 13~25) 13~15は甕で、13は長胴甕、14は球胴甕にあたり、15は底部のみであるが14と同様のものとみられる。16は坏であろうか、口縁部が大きく立ち上がっている。17~19は坏で、口縁部がそのまま直線的やや外傾しながら内湾するもの17と緩やかに内湾する18・19などがある。20~22は高坏、23~25は底部に複数の孔が穿たれた甑である。

平安時代 (第19・20図 26~54) 26・27は甕、28~42は土師器坏で内37~41は墨書である。40には「嶋西」と書かれた文字がみえる。43~51は皿類で49に渦巻きの暗文、50・51には墨書の文字がみられる。52~54は末葉の雲母を多く含んだ小皿である。

須恵器・陶磁器類 (第20・21図 55~68) 55・56は甕の口縁部、57は須恵器蓋、58は高坏、59は坏蓋、60は坏、61は長頸壺、62・63は甕胴部片、64は壺で、65は小形の平瓶とみられる。

66・67は緑釉陶器で66は碗、67は耳皿で、後者は二重高台を有し輪状文がある。

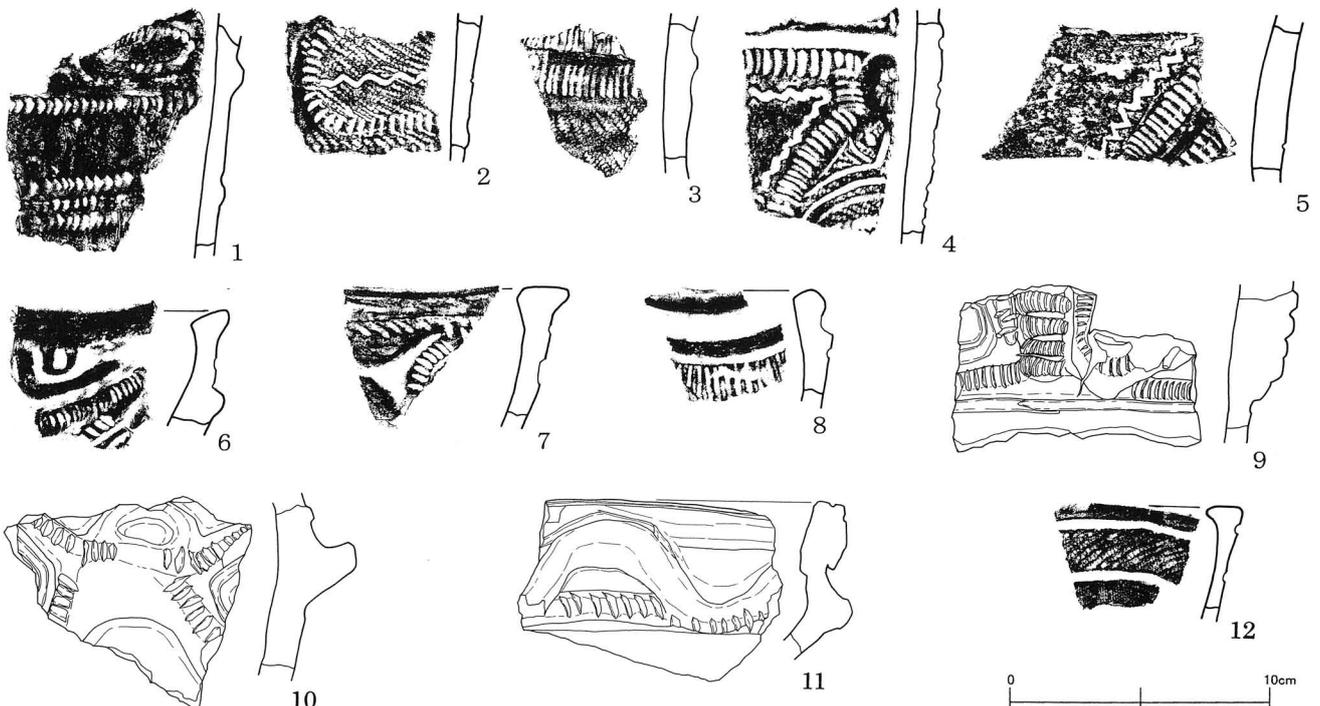
68は幅広の「蛇ノ目高台」を有する中国産の白磁底部の破片である。

中世 (第21図 69~73) 69は青磁碗の口縁部で鎬連弁文が観察され、このほか口縁部などを含む破片13点がある(カラー図版)。70は古瀬戸後期(15世紀中頃)の御目付大皿、71・72は天目茶碗で古瀬戸後期(14世紀後半代)のものである。73は内耳土器の内耳部の破片にあたる。

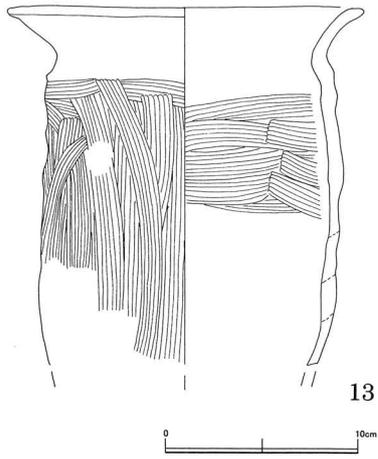
土製品 (第21図 74~76) 74は土玉、75は土錘で、76は紡錘車であろう。

石器 (第21図 77~82) 77~79は黒曜石製の石鏃、80は凹石、81は打製石斧、82は磨製石斧の基部が欠損したものである。

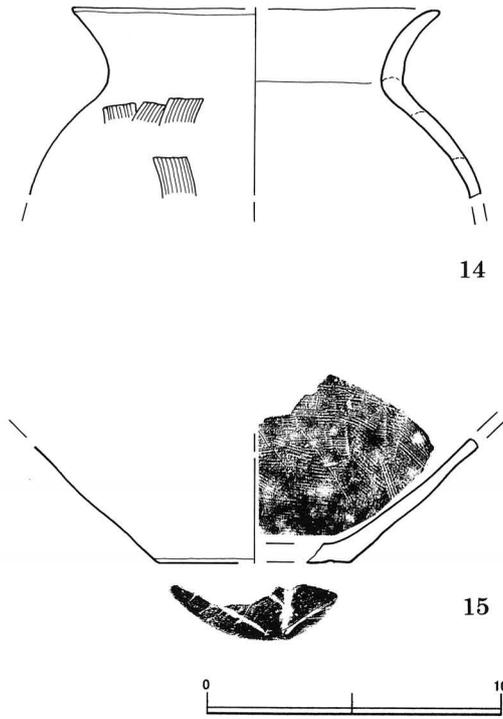
その他 欠損した刀子片1点や大小の鉄滓があり、またこのほかフイゴの羽口先端が溶融し、破損した破片なども数点出土している。



第17図 遺構外出土遺物(1)

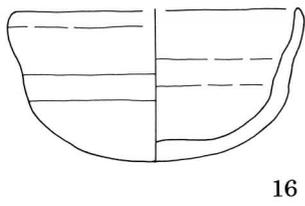


13

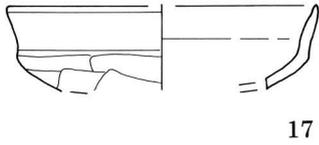


14

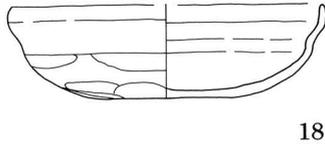
15



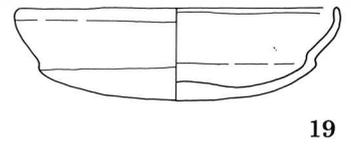
16



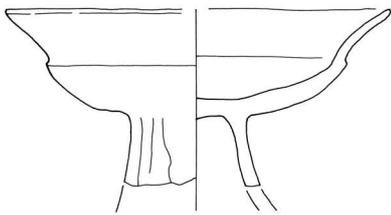
17



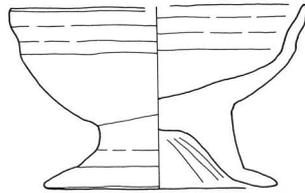
18



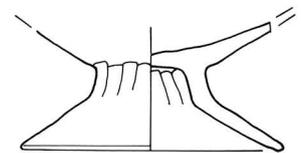
19



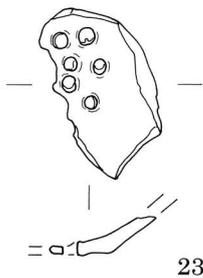
20



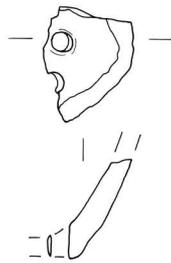
21



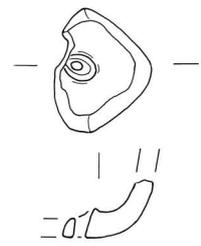
22



23



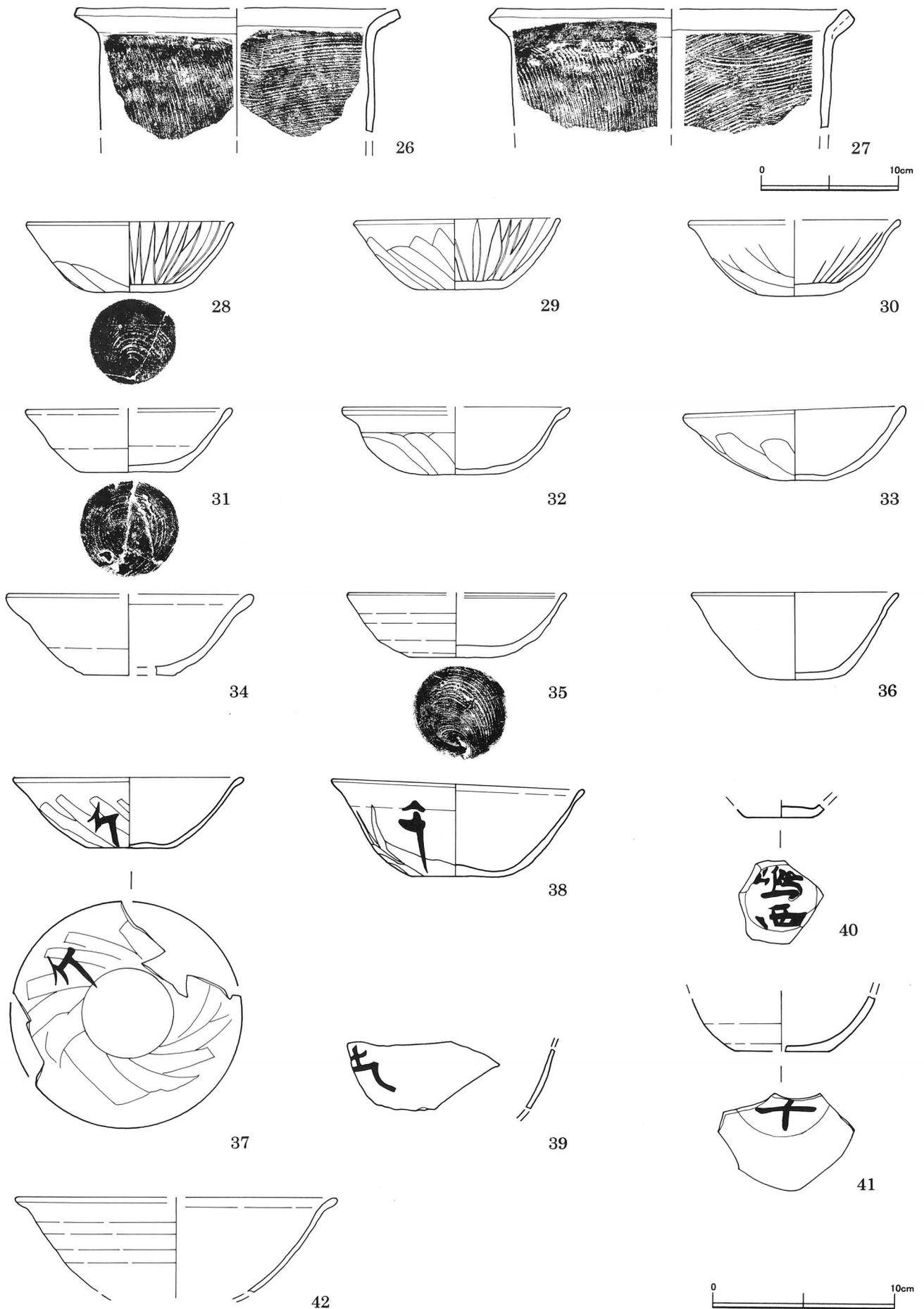
24



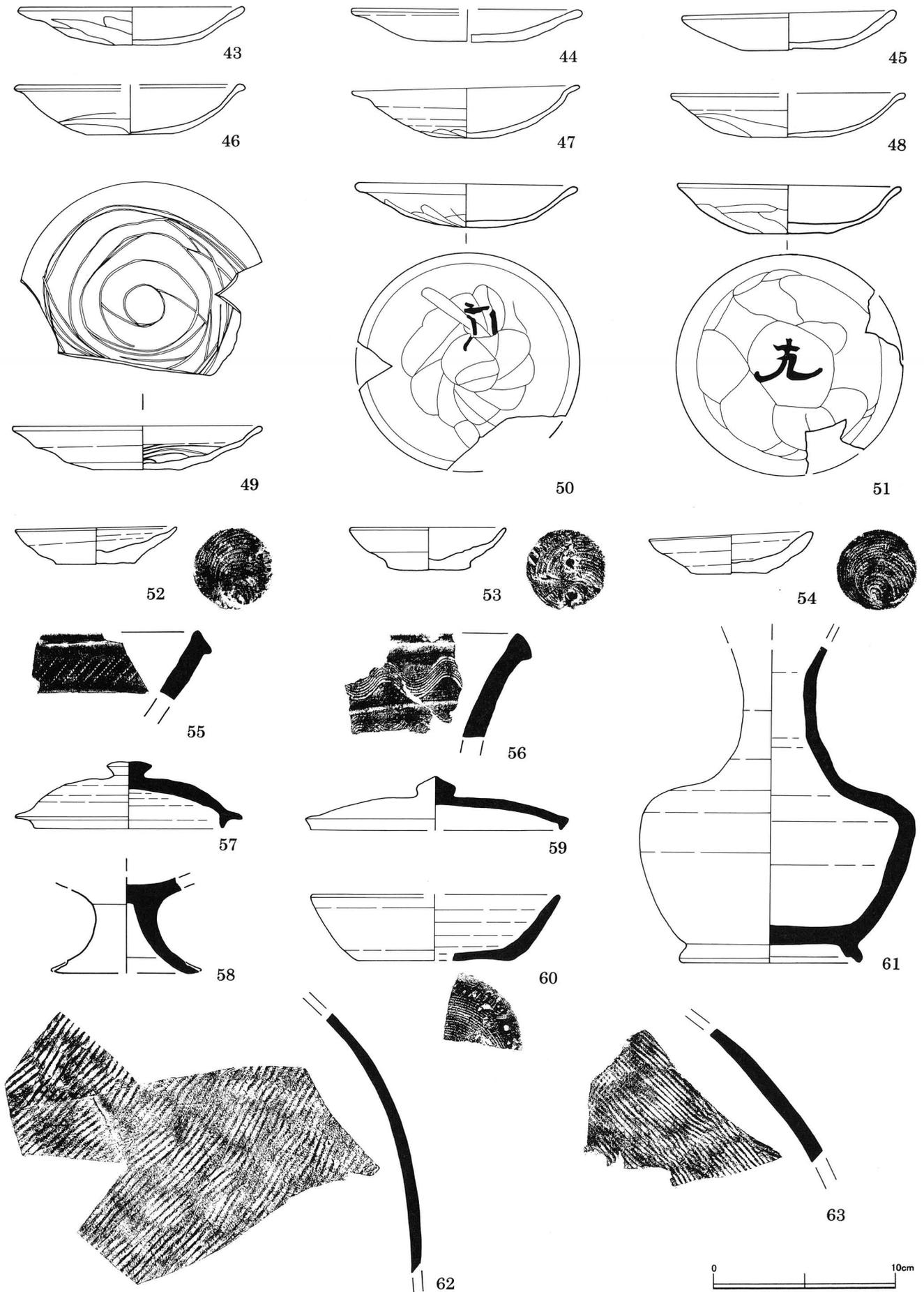
25



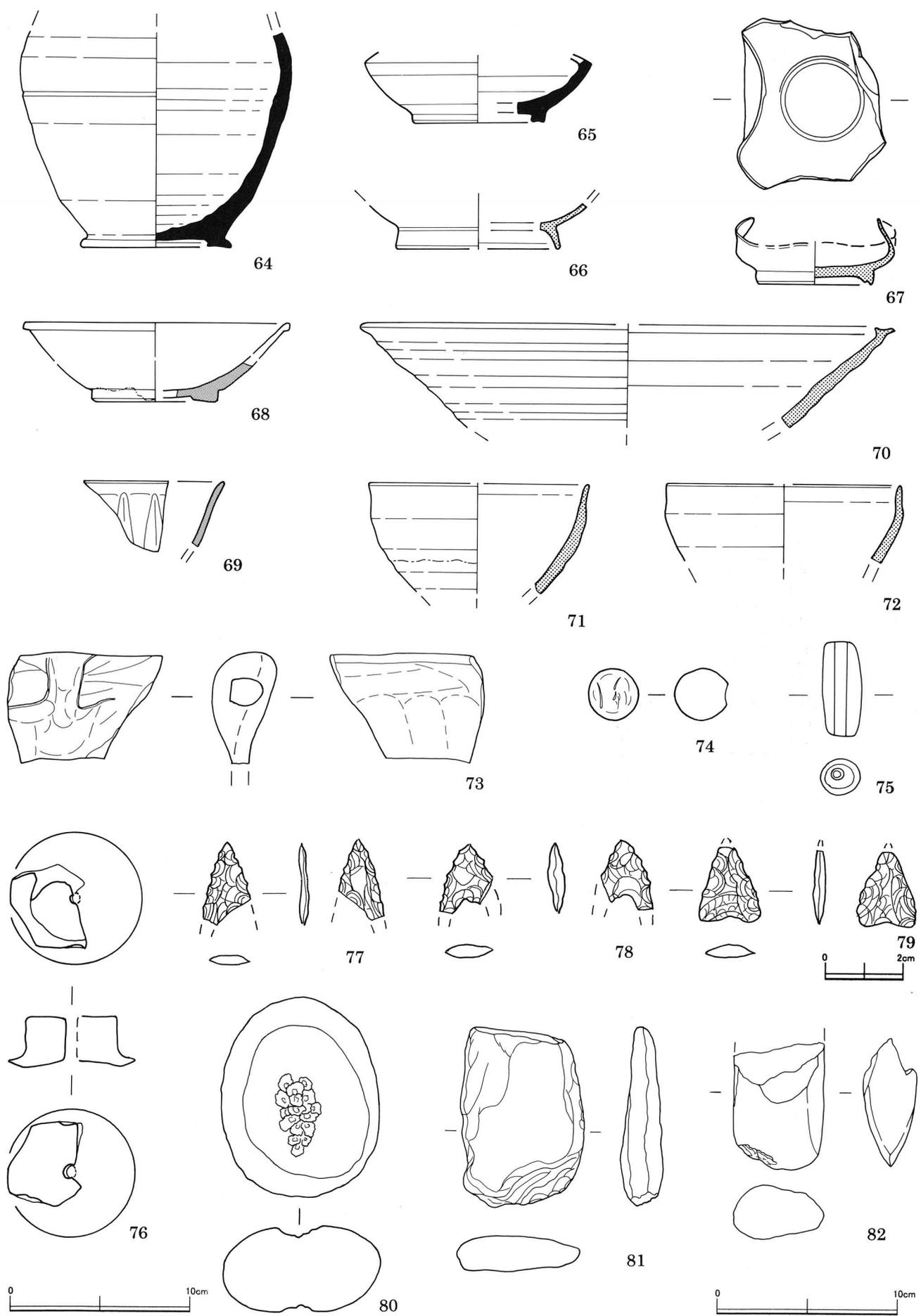
第 18 図 遺構外出土遺物 (2)



第 19 図 遺構外出土遺物 (3)



第 21 図 遺構外出土遺物 (5)



第 21 图 遺構外出土遺物 (5)

No.	出土地区	種別	部位	文様・調整・特徴	胎土	色調	焼成	図版
第17図1	D-2	縄文	胸部	楕円や横位の隆線があり、隆線脇に三角押文を充填。	やや粗、白色粒子、石英、黒雲母	にぶい橙褐色	良	8-3
第17図2	C-2	縄文	胸部	地文RL縄文。楕円区画の隆線があり、脇に角押文を充填。楕円区画の中央に横位の波状沈線。	やや粗、白色粒子、金雲母	にぶい赤褐色	良	8-3
第17図3	D-2	縄文	胸部	地文RL縄文。隆線脇に楕円の角押文を充填。	粗、白色粒子、長石、金雲母	にぶい赤褐色	良好	8-3
第17図4	D-2	縄文	胸部	地文RL縄文。楕円の角押文で区画。内側に波状沈線。	やや粗、白色粒子、石英、黒雲母	にぶい黒褐色	良	8-3
第17図5	C-2	縄文	胸部	斜位隆線脇に楕円の角押文。脇に波状沈線。	粗、赤・白色粒子、石英、黒雲母	褐色	良	8-3
第17図6	D-2	縄文	口縁部	刻みのある隆帯に沿って沈線を施文。	粗、赤・白色粒子、長石	橙褐色	良好	8-3
第17図7	D-2	縄文	口縁部	口縁に沿って斜位の刻み。三叉文と角押文。	粗、赤・白色粒子、長石、金・黒雲母	にぶい赤褐色	良好	8-3
第17図8	C-2	縄文	口縁部	隆帯で区画された中を縦位の沈線で充填。	やや粗、赤・白色粒子、黒雲母	明褐色	良好	8-3
第17図9	D-2	縄文	口縁部付近	地文RL縄文。刻みのある横・縦位隆帯。一部半肉彫り。	粗、赤・白色粒子、長石、石英、黒雲母	にぶい赤褐色	良	8-3
第17図10	D-2	縄文	口縁部付近	刻みのある隆帯で人形状の抽象文。	粗、白色粒子、長石、石英、黒雲母	暗褐色	良	8-3
第17図11	D-2	縄文	口縁部	浅鉢。口唇部沈線。刻みのある横位隆帯上に波状隆帯。	粗、赤・白色粒子、長石、金雲母	にぶい橙褐色	良	8-3
第17図12	B-3	縄文	口縁部	2条の横位沈線内に地文LR縄文。	やや粗、赤色粒子、長石、石英	にぶい黒褐色	良好	8-3

No.	出土地区	種別	器形	計測値 (cm)			胎土	色調	焼成	器形の特徴	図版
				器高	口径	底径					
第18図13	B-4	土師器	長胴甕	19.2	18.4	—	やや粗、赤色粒子、石英	茶褐色	良	内外面口縁部横位ナデ。外面胸部縦・横位ハケ目。内面胸部横位ハケ目。	8-3
第18図14	D-2	土師器	丸胴甕	—	(19.0)	—	長石・石英	淡褐色	良	口辺部横ナデ。外面縦位ハケ目。内面横位ハケ目。	8-3
第18図15	D-2	土師器	丸胴甕	—	—	(10.0)	緻密	淡茶色	良	外面ハケ後、わずかにへら磨き。内面不規則なハケ目。木葉痕。	8-3
第18図16	一括	土師器	坏	6.0	10.9	—	長石	淡橙褐色	良好	口縁部横ナデ。	8-3
第18図17	D-3	土師器	坏	—	(12.0)	—	緻密	外面 淡茶色 内面 黒色	良	口辺部横ナデ。	8-3
第18図18	C-3	土師器	坏	3.7	12.0	—	緻密、赤色粒子、長石	暗茶色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半横位へら削り。外面底部へら削り。	8-3
第18図19	C-3	土師器	坏	3.7	12.2	—	緻密、赤色粒子、長石	橙褐色	良好	口辺部横ナデ。内面へら磨き。外部口辺部横位磨き。体部～底部磨き。外部口辺～体部一部朱。	8-3
第18図20	A-1	土師器	高坏	(7.0)	(15.0)	—	緻密	淡茶色 (一部黒色)	良好	口辺部横ナデ。内面脚部指頭整形。外部脚部へら削り。	8-3
第18図21	C-3	土師器	高坏	7.3	(11.4)	(9.2)	細、赤色粒子	淡茶色 (一部黒色)	良好	口辺部横ナデ。内面脚部へら。	8-3
第18図22	B-4	土師器	高坏	5.1	—	(9.6)	緻密	淡茶色	良好	裾部横ナデ。内外面接合部縦位へら。	8-3
第18図23	一括	土師器	甌	—	—	—	緻密、赤色粒子	橙褐色	良好	8箇所の円孔(内2箇所は半欠)。	8-3
第18図24	一括	土師器	甌	—	—	—	緻密、赤色粒子、長石、黒雲母	橙褐色	良	3箇所の円孔(内2箇所は半欠)。	8-3
第18図25	一括	土師器	甌	—	—	—	細、赤色粒子	赤褐色	良	1箇所の円孔のみ残存。	8-3
第19図26	D-3	土師器	甕	—	(23.3)	—	金雲母	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ。内面横位ハケ目。外面縦位ハケ目。	8-3
第19図27	D-3	土師器	甕	—	(25.5)	—	金雲母、長石	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ。内面横位ハケ目。外面縦位ハケ目。	8-3
第19図28	C-3	土師器	坏	4.0	11.2	3.6	緻密、赤色粒子、長石	橙褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へら削り。内部放射状暗文。底部糸切り痕。	8-3
第19図29	C-3	土師器	坏	4.0	11.4	4.8	緻密、赤色粒子、長石	橙褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へら削り。内部放射状暗文。底部糸切り痕後、へら削り。スス付着。	8-3
第19図30	C-2	土師器	坏	4.3	(11.5)	3.5	細、赤色粒子	明橙褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へら削り。内部放射状暗文。底部糸切り痕後、へら削り。	8-3
第19図31	C-3	土師器	坏	3.6	11.1	5.2	細	明橙褐色	良	口辺部横ナデ。底部糸きり痕。	8-3
第19図32	A-1	土師器	坏	3.7	12.4	4.3	緻密、赤色粒子、長石	橙褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へら削り。底部糸切り痕後、へら削り。	8-3
第19図33	C-2	土師器	坏	4.3	11.9	3.0	細、赤色粒子	橙褐色	良	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へら削り。底部糸切り痕。スス付着。	8-3
第19図34	B-4	土師器	坏	4.75	(13.5)	(6.6)	細、赤色粒子	淡灰茶色	良好	口辺部横ナデ。底部糸切り痕。スス付着。	8-3
第19図35	A-1	土師器	坏	3.6	(11.8)	5.2	緻密、赤色粒子、長石、金雲母	明橙褐色	良好	口辺部から体部下半ナデ。	8-3
第19図36	B-4	土師器	坏	4.9	(12.1)	4.8	長石	淡茶色	良	口辺部横ナデ。	8-3
第19図37	A-1	土師器	坏	4.1	12.4	5.0	長石	明茶色	良好	底部糸切り痕後、へら。墨書「斤」。	9
第19図38	B-4	土師器	坏	4.9	13.6	5.6	金雲母	淡茶色	良好	底部糸切り痕後、へら。外面体部下半斜位へら削り。墨書。	9
第19図39	B-4	土師器	坏	—	—	—	小石	淡茶色 (内黒色)	良好	外面体部斜位へら削り。	
第19図40	C-2	土師器	坏	—	—	4.0	緻密	暗褐色	良好	外面底部墨書「嶋西」。底部糸きり後、へら削り。ロクロ左回転。	9
第19図41	C-3	土師器	坏	—	—	(5.3)	緻密	外面 白茶色 内面 黒色	良	外面底部墨書。底部糸きり後、へら削り。	9
第19図42	B-4	土師器	坏	(5.4)	(17.8)	—	緻密、赤色粒子	淡褐色	良好	口縁部横ナデ。外面体部下半へら削り。	
第20図43	C-1	土師器	皿	2.2	12.3	3.7	細、赤色粒子、長石	赤褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へら削り。底部へら削り。	8-3
第20図44	C-3	土師器	皿	1.8	(12.5)	6.2	細、赤色粒子、長石、金雲母	明橙褐色	良好	口辺部横ナデ。底部糸切り痕。	8-3
第20図45	B-4	土師器	皿	2.2	12.0	4.9	細	明茶色	良	口辺部横ナデ。底部糸切り痕。	8-3
第20図46	C-3	土師器	皿	2.8	12.0	4.8	緻密	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ。外面体部～底部へら削り。	8-3
第20図47	B-4	土師器	皿	3.0	12.8	3.0	緻密	橙褐色	良好	口辺部横ナデ。外面体部下半斜位へら削り。底部へら削り。	8-3
第20図48	1号住	土師器	皿	2.5	12.4	4.5	長石	橙褐色	良	口辺部横ナデ。外面体部～底部へら削り。ロクロ右回転。	
第20図49	D-3	土師器	皿	2.5	(13.6)	4.9	細 赤色粒子	赤褐色	良好	口辺部横ナデ。内部渦巻状暗文。外部回転へら削り。底部回転へら削り。	8-3

第6表 遺構外出土遺物観察表(1)

第20図50	B-4	土師器	皿	2.4	12.4	3.0	赤色粒子、長石	明茶色	良好	底部～体部外面斜位へラ削り。墨書。	8-3、9
第20図51	B-4	土師器	皿	2.8	12.5	4.4	赤色粒子、長石	赤褐色	良好	口辺部横ナデ、外面体部下半と底部横位へラ削り。底部墨書。	8-3、9
第20図52	B-2	土師質土器	小皿	2.1	8.8	4.4	金雲母	茶褐色	良	口辺部横ナデ。底部糸切り痕。ロクロ右回転。	8-3
第20図53	B-2	土師質土器	小皿	2.3	8.6	4.6	金雲母	淡褐色	良好	口辺部横ナデ。底部糸切り痕。ロクロ右回転。	8-3
第20図54	B-2	土師質土器	小皿	2.2	8.9	4.0	金雲母	茶褐色	良好	口辺部横ナデ。底部糸切り痕。ロクロ右回転。	8-3
第20図55		須恵器	壺	—	—	—	緻密	淡灰色	良好	外面口辺部櫛状工具の斜位刺突文。	9
第20図56	一括	須恵器	壺	—	—	—	緻密	外面 灰色 内面 灰茶色	良好	外面口辺部櫛波状文。	9
第20図57	B-1	須恵器	蓋	3.8	(12.7)	—	緻密、長石、硬質	灰白色	良	ロクロ整形。	9
第20図58	一括	須恵器	高杯	(5.3)	—	(7.0)	緻密	灰白色	良好	ロクロナデ。	9
第20図59	C-2	須恵器	蓋	(3.5)	(13.8)	—	緻密、長石、金雲母	外面 明褐色 内面 灰茶色	良好	ロクロナデ。	9
第20図60	A-1	須恵器	杯	4.75	13.8	8.7	細、長石	淡灰茶色	良好	口辺部横ナデ。底部糸切り痕。	9
第20図61	C-1	須恵器	長頸壺	17.8	—	9.8	細、白色粒子、石英、小石	暗赤褐色	良好	体部下半斜位へラ削り。	9
第20図62	一括	須恵器	壺	—	—	—	緻密	外面 灰茶色 内面 暗灰色	良好	外面平行叩き目。内面横位ハケ目。	
第20図63	B-1	須恵器	壺	—	—	—	緻密	淡灰色	良好	外面平行叩き目。内面ナデとヘラ。	
第21図64	B-4	須恵器	壺	(12.1)	—	8.0	細、長石	灰茶色	良好	内面底部および外面自然釉。	9
第21図65	一括	須恵器	小型の平瓶	—	—	(7.3)	緻密	外面 茶褐色 内面 灰茶色	良好	内面底部および外面自然釉。	9
第21図66	一括	陶器	緑釉碗	—	—	(9.0)	緻密	黄緑	良好	高台部横ナデ。外面接合部へラ磨き。	9
第21図67	B-4	陶器	緑釉耳皿	3.7	(10.5)	6.6	緻密	黄緑	良好	折戸53号窯式。	9
第21図68	一括	磁器	白磁碗	—	—	(6.8)	緻密	淡白色	良好	蛇の目の高台。生産年代9～10世紀代。	9
第21図69	一括	磁器	青磁碗	—	(13.3)	—	緻密	淡緑色	良好	外面体部鏤連弁文。	9
第21図70	一括	陶器	卸目付大皿	—	(29.6)	—	緻密	明黄緑色	良好	内外面施釉。古瀬戸後IV期古。	9
第21図71	一括	陶器	天目茶碗	(6.0)	(10.4)	—	緻密	黒茶色	良好	古瀬戸後I期。	9
第21図72	一括	陶器	天目茶碗	(4.4)	(13.0)	—	緻密	黒色	良好	古瀬戸後II期？。	9
第21図73	B-1	陶器	内耳土器	—	—	—	緻密	淡灰茶色	良	外面スス。内面耳部貼付。	9

No.	出土地区	種別	器形	計測値 (cm)			胎土	焼成	特徴	図版
				長径	短径	厚さ				
第21図74	一括	土製品	土玉	2.9	2.9	2.9	緻密	良好	外面部分的に刻み。	9
第21図75	B-4	土製品	土鏝	5.4	2.2	2.2	金雲母、長石	良	直径6mmの円孔。	9
第21図76	D-2	土製品	紡錘車？	(7.1)	—	2.8	金雲母、長石	良	中心に最大径8mmの円孔。	9

No.	出土地区	器種	計測値 (cm)			石質	図版	No.	出土地区	器種	計測値 (cm)			石質	図版
			最大長	最大幅	最大厚						最大長	最大幅	最大厚		
第21図77	B-1	石鏝	(2.0)	(1.1)	0.2	黒曜石	9	第21図80	C-1	叩き石	11.3	8.8	4.9	安山岩	9
第21図78	B-1	石鏝	(1.7)	(1.2)	0.4	黒曜石	9	第21図81	C-3	打製石斧	10.2	6.8	2.4	片岩	9
第21図79	C-2	石鏝	(1.9)	1.5	0.3	黒曜石	9	第21図82	B-3	磨製石斧	(7.1)	5.0	(3.0)	緑色凝灰岩	9

第7表 遺構外出土遺物観察表(2)

まとめ

松ノ尾遺跡はこれまでの第I・II次調査で弥生時代末頃～古墳時代初頭の住居跡1軒、古墳時代後期住居跡計13軒、竪穴状遺構1基、奈良時代住居跡計3軒、平安時代住居跡計24軒、竪穴状遺構計6基が発見されており、とくに古墳時代後期から平安時代にかけての大きな集落跡であることが近年明らかとなってきている。

今回の第III次調査は、わずか約250㎡の調査範囲であったが縄文、古墳、平安時代の住居跡計7軒、土坑2基、溝状遺構3条と土器をはじめとする多くの遺物が出土し貴重な成果を得た。

縄文時代 中期中葉の住居跡が1軒確認され、本遺跡内では今回該期の遺構としてはじめての発見となった。

古墳時代 住居跡2軒が発見され、いずれも遺物から7世紀前半に相当するものとみられる。

本調査に限らずこれまで町内で行われてきた大小の試掘調査の結果を含めてみても、荒川と貢川に挟まれた町南部の扇状地形のなかで、該期の遺構・遺物が多く確認できるのは、今のところほぼ「松ノ尾遺跡」に限られる。第II次調査では7世紀の住居跡が3軒のほか、奈良時代の住居跡3軒が発見されており、今後さらに本遺跡内の該期の遺構数は増加してることが予測される。

甲府盆地北西部地域の古墳時代後期（とくに6世紀後半～7世紀前半）は敷島町南部の周囲に古墳ならびに群集墳が相次いで築造されるようになる（第1図参照）が、しだいに有力豪族によるそれまでの古墳造営は終焉を迎え、7世紀後半頃になると本遺跡から北西へ約2kmの通称敷島台地の西側斜面に天狗沢瓦窯が操業

を開始するようになり、古代寺院建立へと力が注ぎ込まれるようになっていくことから、本地域においてはこのころ大きな画期を迎えることとなる。

今回発見された住居跡は周辺の地理的環境や古墳の分布状況等から古墳造営（とくに赤坂台）に何らかのかたちで携わった人々の集落の一部であった可能性が考えられる。今後、盆地北西部地域における該期の様相を解明していく上でも本遺跡の更なる調査成果が大いに期待される。

平安時代 4軒の住居跡が確認された。このうち、5号住居跡は出土した遺物の内容から9世紀後半に位置付けられ、残りの3軒2・3・6号住居跡は10世紀前半ころに相当する。先の古墳時代と同様に本遺跡には該期の遺構が広範囲に分布することが明らかとなっている。

遺構外からは緑釉陶器の碗、皿など破片5点のほか、今回緑釉の耳皿(67)が出土している（カラー図版）。この耳皿は残念ながら遺構には伴っていなかったが、形態等から10世紀前半頃（折戸53窯式）のものと思われる（註1）、時期的には今回発見された集落ともほぼ併行している。

また、遺構外からであるが白磁(68)が出土した。これは「蛇ノ目高台」と呼ばれる畳付きで幅広の低い高台をもつ特徴があるもので、いわゆる「初期貿易陶磁」に属するものである。

初期貿易陶磁器は、日本の遺跡では8世紀末葉～10世紀前半頃にみられるようで、代表的なものには越州窯青磁、唐様式の白磁、長沙窯の黄釉陶器などが上げられる。これまで全国的に北は秋田県から南は鹿児島県までの遺跡で発見されているようであるが、「博多、大宰府、平安京を除くと、遺跡ごとの出土量は一片ないし数片にすぎず、その遺跡の性格も官衙や寺院などに限定されている」（今井2000）ともいわれている。なお、白磁(68)は中国邢窯産とみられる（註2）。

その他 遺構外から陶磁器類が出ている。貿易陶磁器では青白磁・青磁計13片（カラー図版）が出土しており、これらは12世紀後半～13世紀代に相当し、青白磁1片、劃花文7片と鎬蓮弁文5片などがある。

国産陶器類は、灰釉平碗片1点、卸目付大皿片1点、天目茶碗片2点、内耳土器片7点などがあり、これらはおよそ古瀬戸後期段階に相当するもので14～15世紀代の資料である（註3）。

以上のように、今回の調査では本遺跡の過去の成果からもとくに古墳時代、平安時代については遺構密度の高い状況が遺跡内の広い範囲に及んでいることを裏付ける結果であったといえよう。

また、明確な遺構等は確認されなかったが中世の陶磁器類の資料も出土しており、周辺には該期に関する何らかの遺構ないし生活面が存在すると思われる。

（註1）文化庁美術工芸課主任文化財調査官 斎藤孝正氏の御教示による。

（註2）京都市埋蔵文化財研究所 百瀬正恒氏の御教示による。

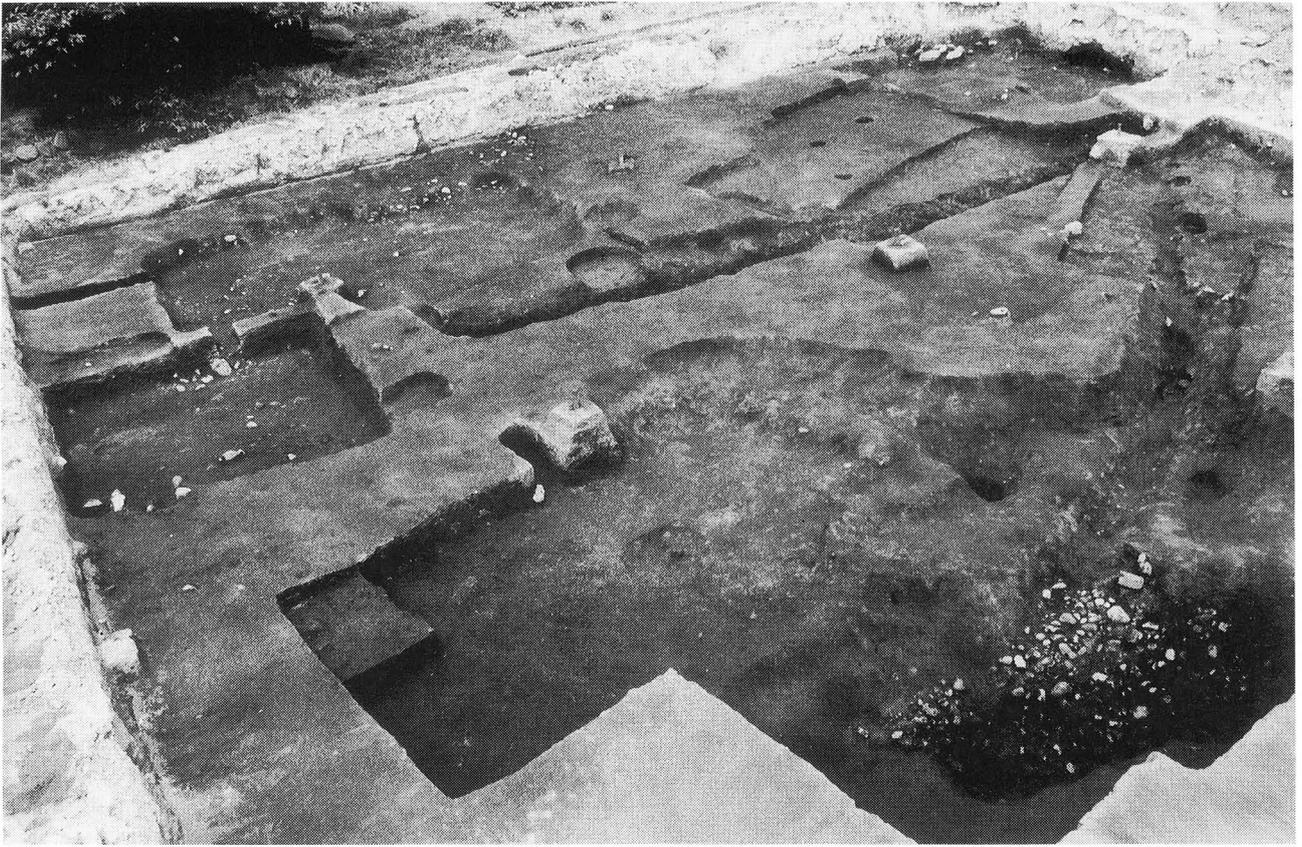
現在県内では類例はみられないが、同様な白磁が近県の長野県において確認できる。

（註3）瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐氏の御教示による。

引用・参考文献

- 今井 敦 2000『日本の美術7』No.409 文化庁／東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館
齊藤孝正 2000『日本の美術6』No.410 文化庁／東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館
敷島町誌編纂委員会 1966『敷島町誌』敷島町役場
敷島町教育委員会 1992『天狗沢瓦窯跡と古代甲斐国』第2回敷島歴史フォーラム
敷島町教育委員会 2001『埋蔵文化財試掘調査年報'01』敷島町文化財調査報告第10集
敷島町教育委員会 2002『埋蔵文化財試掘調査年報'02』敷島町文化財調査報告第11集
十菱駿武 1988『竜王町の遺跡－竜王町遺跡詳細分布調査報告』山梨県中巨摩郡竜王町教育委員会
森原明廣 1991『金の尾遺跡－第Ⅱ次発掘調査報告書』敷島町教育委員会
萩原孝一・米山 真 1997『音羽遺跡』山梨県教育委員会
高野玄明 1995『榎田遺跡』山梨県教育委員会
石神孝子 1996『唐松遺跡』山梨県教育委員会
伊藤正幸 2001『米草遺跡』甲府市教育委員会
伊藤正彦・山崎雅恵 2001『久保之沢遺跡』甲府市教育委員会
山梨県史編纂委員会 1998『山梨県史』山梨県

版 图



1. 調査区全景



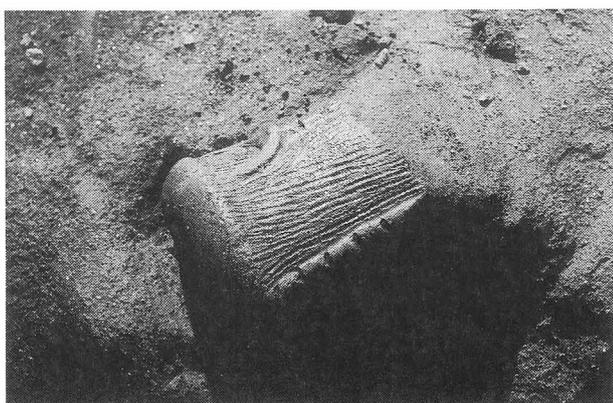
2. 発掘風景 1



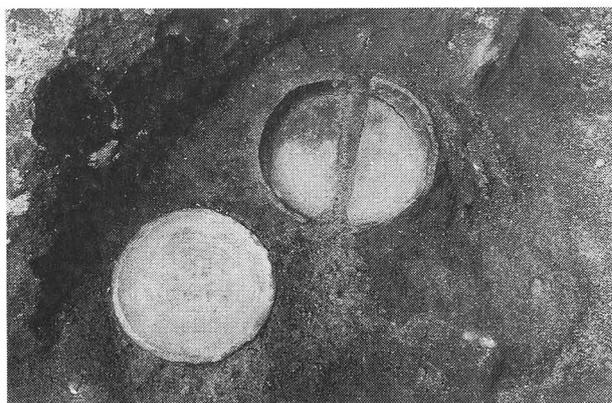
3. 発掘風景 2



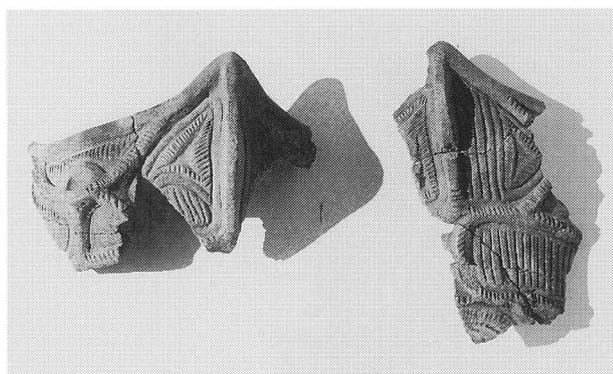
1. 7号住居跡



2. 遺物出土状態 1



3. 遺物出土状態 2



7住-2

7住-1



7住-3



7住-9



7住-10



7住-6~8

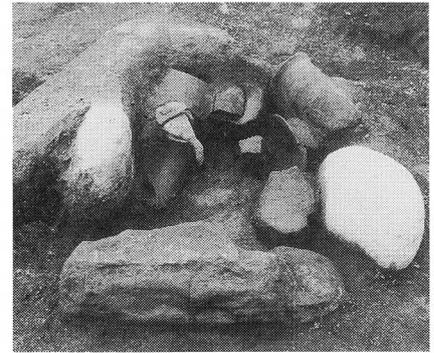


7住-11~19

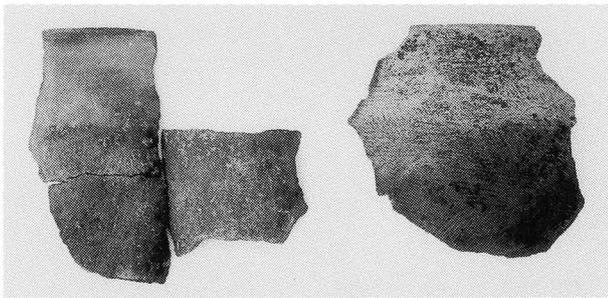
4. 7号住居跡出土遺物



1. 1号住居跡

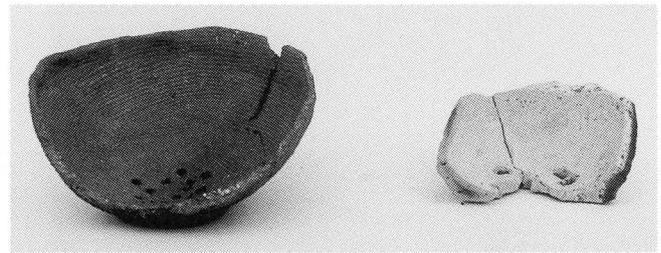


2. 1号住居跡カマド



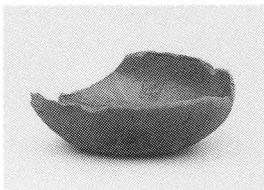
1住-1

1住-2

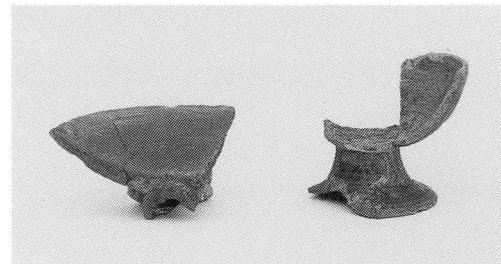


1住-3

1住-4



1住-5

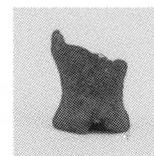


1住-6

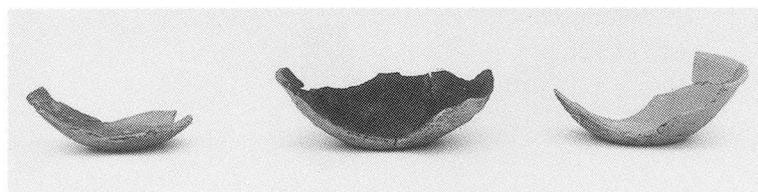
1住-7



1住-8



1住-9



1住-10

1住-11

1住-12

3. 1号住居跡出土遺物



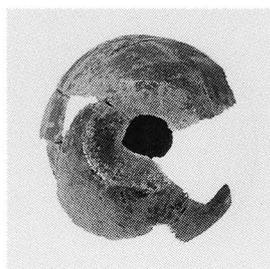
1. 3号住居跡



3住-1



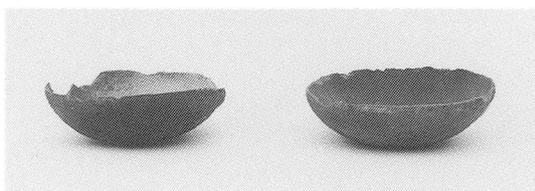
|



3住-2



3住-3



3住-4

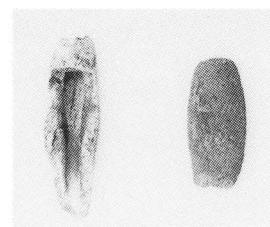
3住-5



3住-6

3住-7

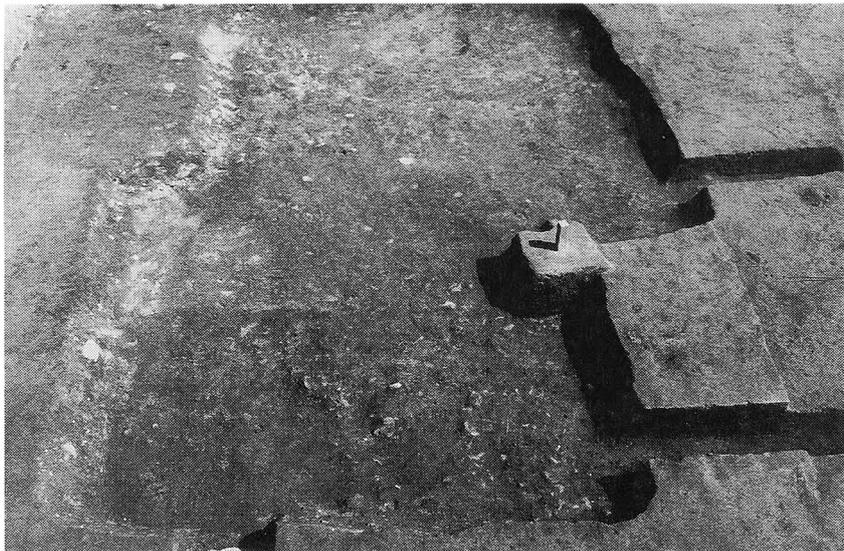
3住-8



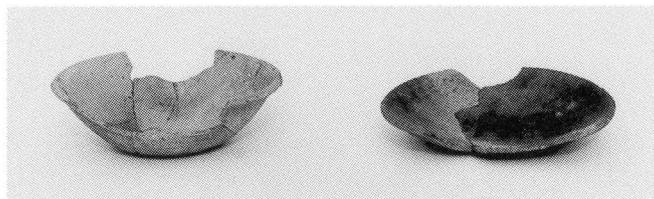
3住-9

3住-10

2. 3号住居跡出土遺物

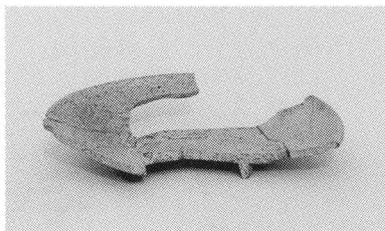


1. 2·4号住居跡



2住-1

2住-2

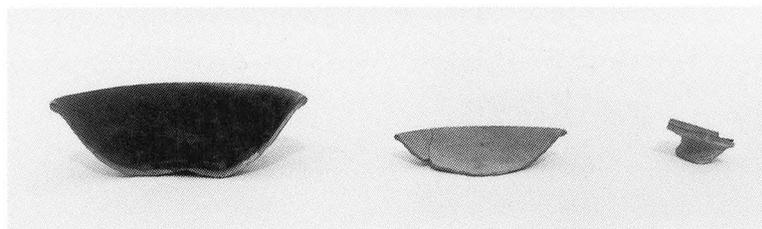


2住-3



2住-4

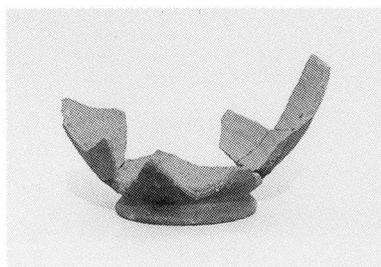
2. 2号住居跡出土遺物



4住-1

4住-2

4住-3



4住-4

3. 4号住居跡出土遺物



1. 5号住居跡



5住-1

5住-2

5住-3

5住-4

5住-5



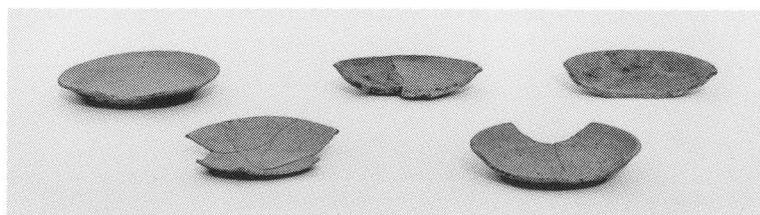
5住-6

5住-7

5住-8

5住-9

5住-10



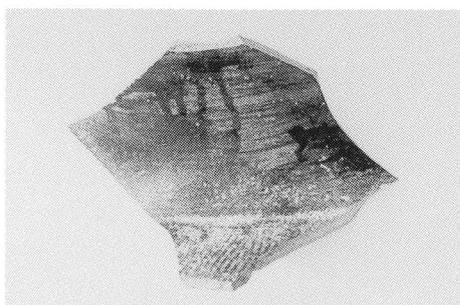
5住-13

5住-11

5住-14

5住-12

5住-15

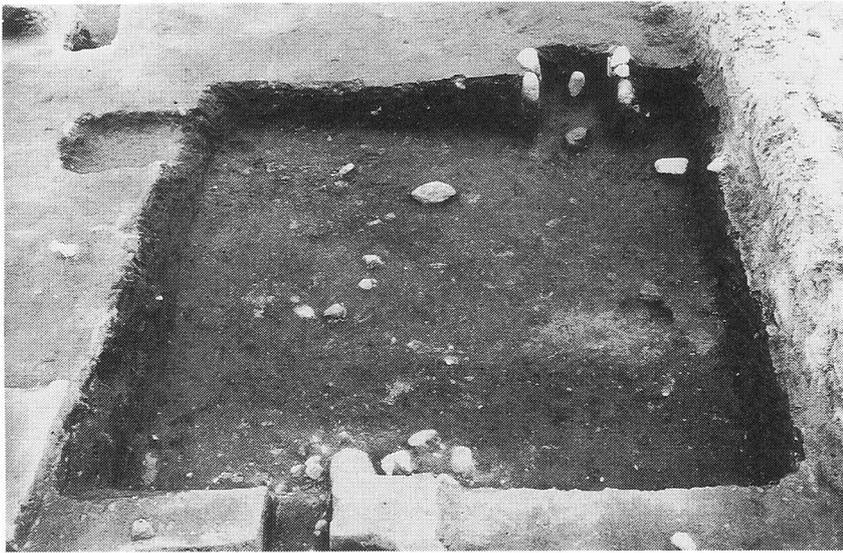


5住-16

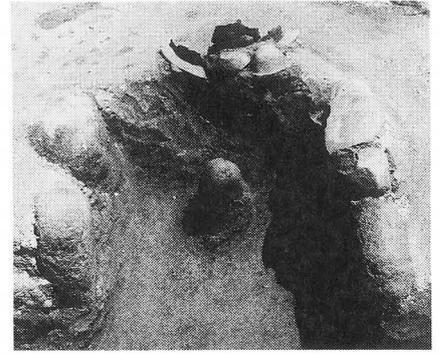


5住-10墨書

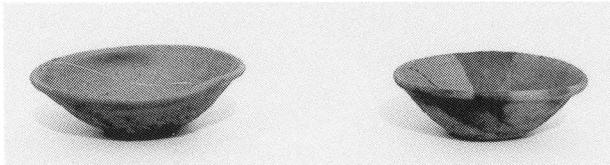
2. 5号住居跡出土遺物



1. 6号住居跡

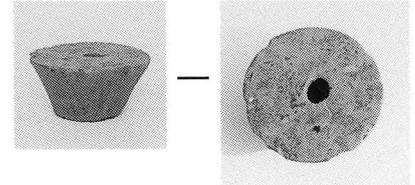


2. 6号住居跡カマド

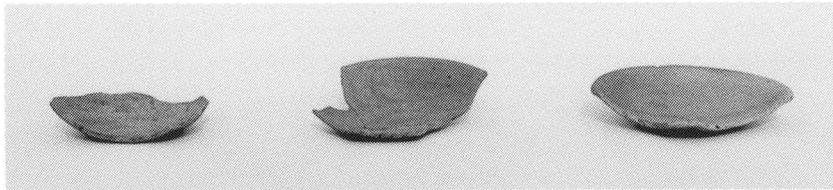


6住-1

6住-2



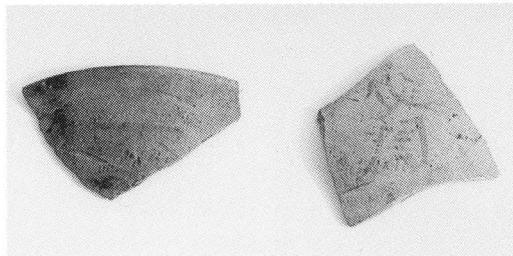
6住-8



6住-4

6住-6

6住-7



6住-3 墨書

6住-5 墨書

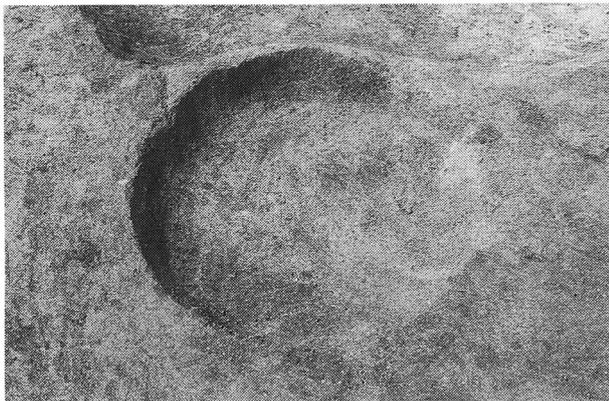


6住-4 墨書

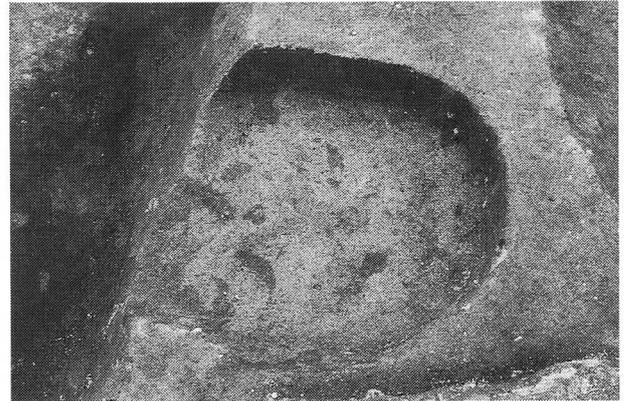


6住-6 墨書

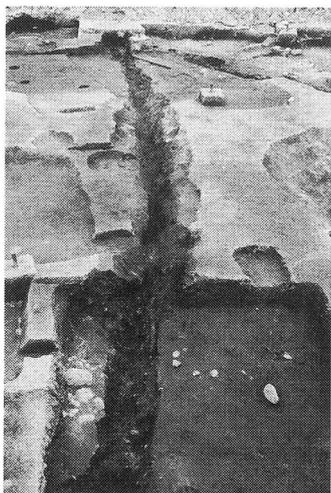
3. 6号住居跡出土遺物



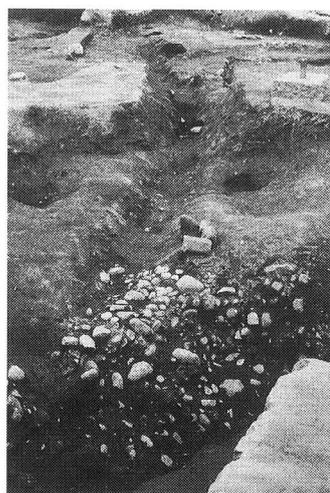
4. 1号土坑



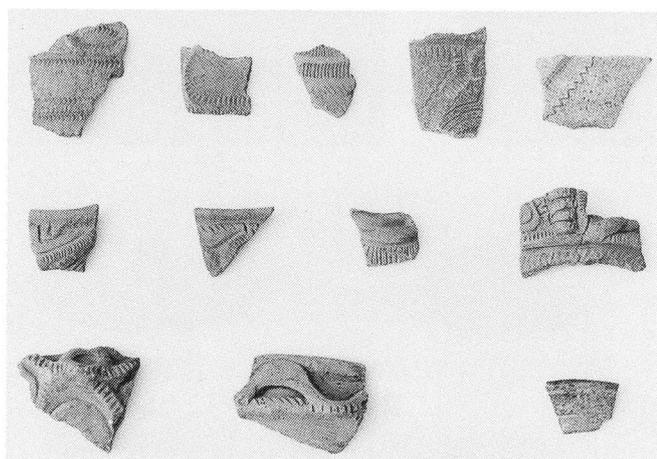
5. 2号土坑



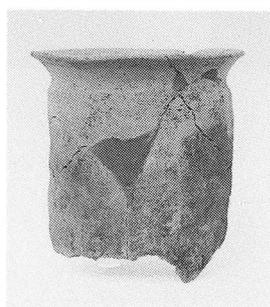
1. 2号溝状遺構



2. 3号溝状遺構



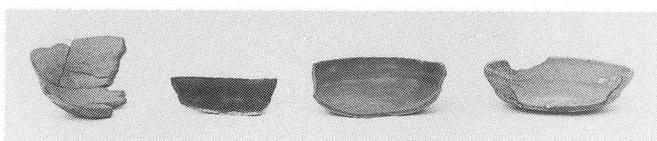
遺外-1~12



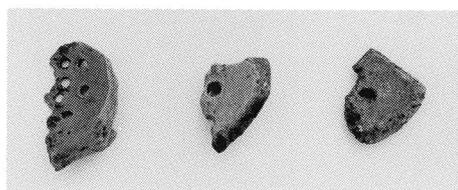
遺外-13



遺外-14・15



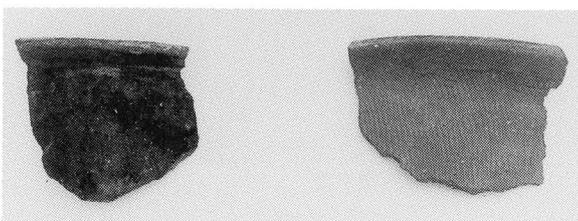
遺外-16~19



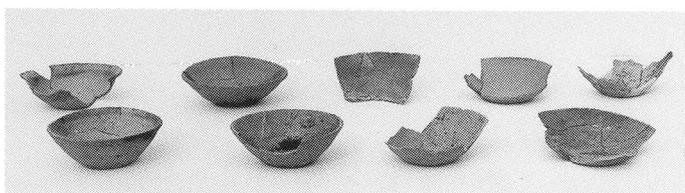
遺外-23~25



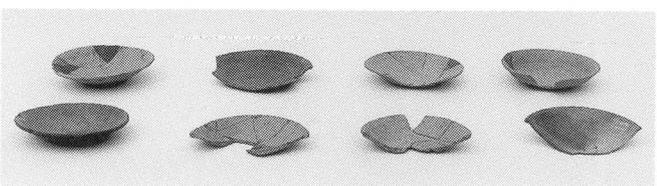
遺外-20~22



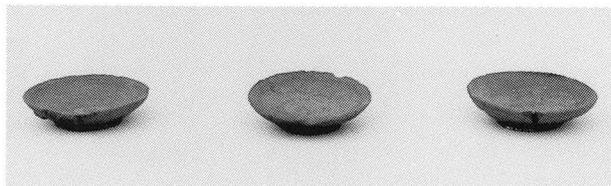
遺外-26・27



遺外-28~36

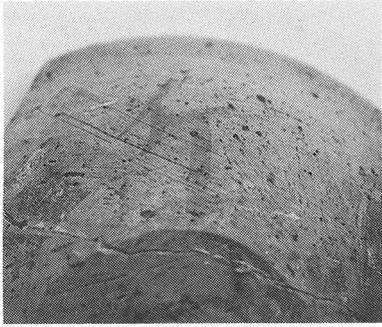


遺外-43~47・49~51



遺外-52~54

3. 遺構外出土遺物 (1)



遺外-37



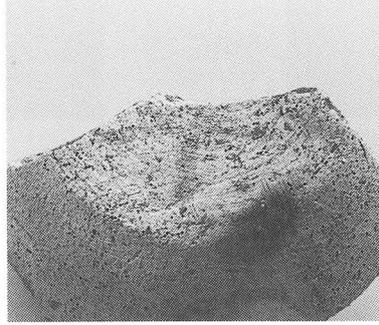
遺外-40



遺外-50



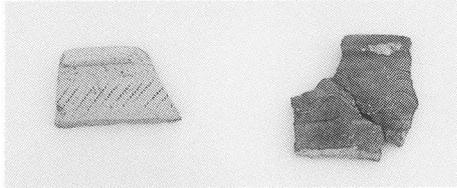
遺外-38



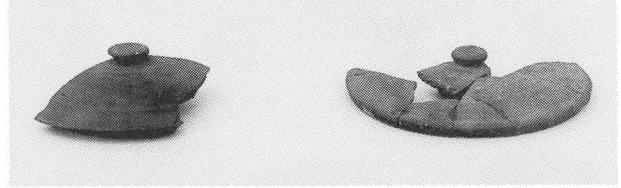
遺外-41



遺外-51



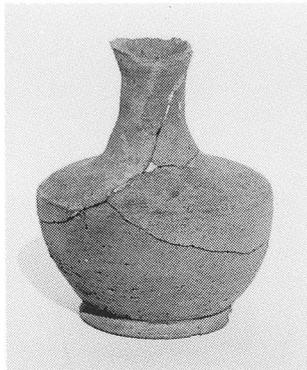
遺外-55・56



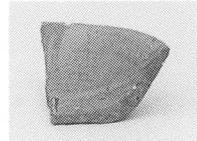
遺外-57・59



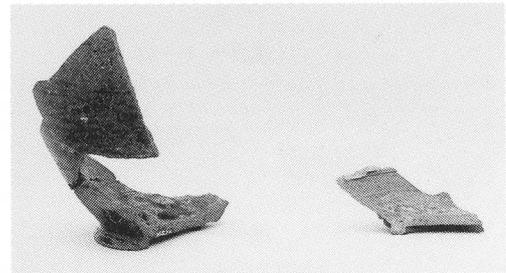
遺外-58



遺外-61



遺外-60



遺外-64・65



遺外-66・67



遺外-70~72



遺外-77~82



遺外-74~76

遺構外出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき							
書名	松ノ尾遺跡Ⅲ次							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	18							
編著者名	大畠正之・小坂隆司							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	平成16年4月20日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町大下条 122-1外	193928	18			平成10年 3月13日～ 平成10年 5月11日	250	マンション 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
松ノ尾遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 平安時代	住居跡 土坑 溝状遺構	縄文土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	縄文住居跡から深鉢形土器底部を再利用した 皿状の土器3点と有孔のミニチュア土器出土。 また、緑釉陶器の耳皿、初期貿易陶磁器である 白磁Ⅰ類が出土。			

敷島町文化財調査報告 第18集

松ノ尾遺跡Ⅲ

発行日 2004年(H16)4月20日

発行 敷島町教育委員会

山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020

TEL(055)277-4111

印刷 (有)協和印刷社

